

『僕は正之』

【目次】

【第1章】	プロローグ.....	1
【第2章】		9
【第3章】		14
【第4章】		23
【第5章】		31
【第6章】	エピローグ.....	41

【第1章】 プロローグ

途方もなく深く、暗く、広い場所に僕の身体はある。

指の感覚がない。冷たい。氷みたいに身体が凍っている。痛みも何も感じない。意識はもっと深い場所に落ち込んでいて、誰の声も聞こえない。ひとりぼっちの世界。身体はこの重たい世界の中で、漂っている。浸っている。

「.....まさ、ゆき」

名前を、誰かが呼んだ。誰の名前だったっけとしばらく考えて、それが自分の名前だったことを思い出す。そうだ。正之。稲葉正之——それが自分の名前だ。

「.....正之」

名前が呼ばれる。鈴のような軽やかな、そして柔らかな、優しい声。声は、僕の頬をそうっと撫でる。まるで、大切な宝物に触れるように、そうっと、大事そうに。

僕の意識はゆっくりと深く暗いところから浮上をはじめる。身体が海の底から浮き上がっていくような、そんな感覚。だるく重たかった身体の水圧が少しずつ消えて、軽くなっていく。指の感覚が確かになる。

——あ、指、動く。

人差し指がかすかに曲がる。動かすと、その関節が少し痛い。

まぶたの向こう側に光が透ける。まぶしい。目をぎゅうっと強く閉じる。ああ、今度はまぶたが動くようになったみたいだ。ゆっくりとまぶたを開く。真白い光が視界を遮る。

だんだんと光に目が慣れていき、ぼんやりとしていた視界が良好になる。

「おはよう、目が覚めたかしら？」

小さな手が僕の頬をもう一度撫でた。あたたかくて、優しい温度になぜだか泣きそうになる。懐かしい匂い——誰もが居心地よく感じてしまうような、落ち着く香り。

目の前には、一人の少女がいた。

白いワンピースを身にまとった彼女は、ひらりとその白のすそを翻し、微笑む。そして、いたずらっぽく、優しく笑って見せた。

「身体を起こせる？ 少しずつで大丈夫よ」

身体を起こそうと、自分の身体に手を回せば、思っていたよりもずっとひんやりとした自分の肌に触れる。いつもよりも、血色のない肌。関節がすっかり固まっていて、軽く動くだけで、じくりと関節が痛む。

「ずいぶんと長い間、眠っていたのよ。君。無理をしないで」

「うん.....ありがとう」

時間をかけて、身体をようやく起こせば、周囲の景色がようやく開ける。

「わ.....」

地面も空も一面、すべてが白い。白い光がどこまでも続いている。地面に着いた手のひらを動かせば、そこに花が咲いていることに気付く。白色、黄色、オレンジ色、水色、ピンク色、淡い色の花々は時折吹く穏やかな風に揺れ、花びらが頬に触れる。希望に満ちた穏やかな風の匂いがする。夏休みがはじまった瞬間、開けた窓から吹くような風。

「いい風が吹くでしょう」

少女が僕の隣に腰を下ろして、そういった。彼女が三角座りをしたから、僕もその隣で身体を丸くして座った。

「とても綺麗だね、ここ」

「そうよ、私もここがお気に入りなの」

「うん、僕もここが好きだ」

少女は、どこか遠くの見えない何かをぼうっと見つめている。僕もそちらの方向を見てみるけど、何も見えない。感じられもしない。

「君、名前は何ていうの？」

「私はクロチ」

「クロチ.....いい響きの名前だね」

「ええ、そうでしょう。名付けてもらったの、大切な人たちに。ああ、そうだ。君の名前も聞かせてくれる？」

「僕？」

「ええ、そうよ」

僕は視線をぐりと回し、自分の名前を頭の中に巡らせる。先ほどまで呼ばれていた名前。あれが僕の名前、だったと思うんだけど。

「僕は、正之」

僕が名前をいうと、彼女は少し嬉しそうに弾んだ声で僕の名前を呼んだ。

「正之！ いい名前ね」

「僕も.....そう思う。僕もきっと、大切な人たちが名付けてくれた.....ような気がする」

「気がする？」

「あんまり、自分のこと、思い出せないんだ.....」

頭を軽く押さえながら、思考と記憶を巡らせるけれど、どれもぼんやりとした断片的な記憶ばかりだ。自分がどうしてここにいるのか、そんなこともわからない。クロチはそんな僕の顔をじっと見つめ、それから柔らかに頬を緩ませた。

「クロチはどうして、ここにきたの？」

「私？ そうね.....待っていたの.....とても大切な人をずっと待っていた、そのためにここにいたの」

「大切な人か.....僕にもいたような気がするけれど.....」

「長く眠っていたんだから、思い出せないのも当たり前よ。身体も心も、今この瞬間まで冷凍されていたようなものだもの.....少しずつここで解凍していけばいいんじゃないからしら？ 思い出せることから思い出してみれば」

クロチの小さな手が視界を覆った。

「さあ、目を閉じてみて」

「閉じたよ？」

まぶたをぎゅっと閉じて、光を遮る。視界はまた闇。だけど、まぶたの向こうに ぼんやりとした白い光を感じることができる。

「ええっと、僕は.....」

「君は今、何歳？」

「にじゅう.....25 歳だ」

「じゃあ、はじまりに遡っていきましょう、私も手伝うわ。さ、力を抜いて」

——思考と記憶が巡る。深く、遡っていく。

平成七年十月二十一日。それが僕の生まれた日。

「正之、正之」

父さんが僕の名前を呼んで、泣き出しそうなほど、嬉しそうな顔で手を伸ばした。母さんは、出産日が遅れ、帝王切開となり、大変だっただろうに笑っていた。僕が生まれた日、二人は笑っていた。

夜泣きをしては母さんを困らせていたらしいが、とてもよく寝る子だったらしく、すくすくと大きくなった。

「まーくん、どこをみているのかな」

母さんが僕に問いかける。小さな赤ん坊は寝返りをしようと試みるもなかなかできず、飽きると天井をぼうっと見つめて何かを話していたらしい。母さんはそんな僕をみて、ちょっと困った顔をした。多分ちょっと不気味だったんだろうと思う。

「これくらいかなあ.....これなら、食べられる？」

母さんは慣れない離乳食を作り、それをプラスチックの小さな容器にいれると、一緒に小さなスプーンを手渡した。僕は、「きゃっきゃつ」と笑いながら、母さんの作ってくれた離乳食を食べる。その母さんの嬉しそうな顔といったら。

僕は母さんの作った離乳食と、ミルクと、それからたくさんの睡眠で成長をした。

「まーくん、注射も雷も泣いたりしないで、いい子だねえ」

ツベルクリン注射を終えた母さんが僕の髪を撫でた。あたたかくて、優しい温度。

僕は成長を重ねる。特に大きな病気をすることもなく、怪我をすることもなく、小学校に上がった。父さんは仕事の関係で単身赴任をしていたので、母さんと一緒にいる時間が多かった。

「まーくん、今日テストでしょう、頑張ってね」

「まーくん、運動会、母さんみにいくからね」

「まーくん、今日の夕ご飯どうしようか、何か食べたいものはある？」

母さんはいつも僕のことを見ていた。まっすぐに、優しく僕を見守ってくれていた。

周囲の同性の同級生は、母親と話すことが照れくさいのか、恥ずかしいのか、会話が減ってきたり、反発したりが多いとよく話していた。けれど、僕は父さんが家を空ける時間があつたから、父さんの分まで母さんを守らなくてはという気持ちが強かったのかもしれない。あの時の気持ちはうまく思い出せないけれど、でも母さんと一緒にいる時間はとても心地が良かったように思う。

「ただいま、正之」

時間を見つけては、父さんも家に帰ってきた。遠い距離なので、通うのはとても大変だっただろうが、それでも疲れた顔一つせず、お土産とともに僕を抱きしめてくれる父さんのことが僕は大好きだった。

「おかえり、父さん」

「お帰りなさい、お父さん」

三人で囲むたまにしかない食卓はいつも豪勢だった。僕の好きなものと父さんの好きなもの、両方が並んだテーブル。いつもより、笑っている母さんと父さんの顔を見ると、なんだか嬉しい気分になった。どうしてだろう、変わりなんてないはずなのに、食卓を照らすランプが明るく感じたのだ。

父さんがいない日もあつたけど、僕には優しく笑ってくれる母さんがいた。さみしくなんてなかった。

「――すこやかに育ってね、まーくん」

ある夜、母の言葉に目が覚めた。母さんはその柔らかな指で眠る僕の髪をそっと撫でながら、おまじないのように言葉を繰り返した。その言葉がじんわりと胸の真ん中に入ってくる。あたたかくて、優しくて、穏やかな温度。母さんとは一緒にいる時間が長いせいか、時折むっとすることだってあつた。けれど、僕はこの時小学生であつたけれど、それでも心底、この人の子供に生まれてよかったとそう思ったのだった。

あたたかな両親のもと、僕はすくすくと育ち、気がつけば中学生になっていた。

この頃になると、両親に甘えていた僕の姿は少し小さくなっていた。中学校の宿題で日記が出され、僕は毎日それを書くようになった。視力がだんだんと悪くなった僕は、母さんに連れられてメガネ屋でメガネを買った。その時、一番気に入っているかっこいいフレームを選んだら、母さんは嬉しそうだった。

「その時から、メガネをかけているんだね」

クロチが僕の顔を覗き込みながら、そう尋ねた。思ったよりも顔が近かつたから、僕がびっくりして顔をのけてしまう。「びっくりした……！」

「ふふ、びっくりさせちゃったわね。ごめん、話を遮って……続きを話して」

「うん、いいよ」

中学校で、僕は陸上部に入部した。仲の良かった瀬山くんと同じ部活だ。僕は、長距離よりも短距離が得意だった。風をきって走るたびに、頬に触れる冷たい空気の温度が好きだった。授業も、部活も慣れるまでは大変で筋肉痛が全身を襲った。

当時、学校に来ていない藤堂くんがいて、僕は彼のことを知っていたので、時折彼の家にもプリントを届けたり、遊びに寄ったりしていた。彼はいつも苦しそうな表情を浮かべていた。

「学校に行こうと思うと、お腹が痛くなるんだ」

そういつて俯く彼のことを思うと、いつも胸が悲しくなった。

「優しいのね」クロチが言った。

「違うよ、僕は多分……優しく思われたいだけ。いい子だって言われたいだけ」

「優しくされた側の人間からしたら、どんな優しさも変わりはない。君はずっと優しいわ」

クロチの小さな指がそっと僕の髪を撫でた。なぜだかたまらなく泣きたくなる。

中学校での生活にも慣れてきた僕は、教室でも部活でも友達がたくさんできた。

校外学習でみんながどうやったら楽しめるか計画を立てたり、自分の学校の陸上部がいい成績を残せるように頑張ることが何より楽しかった。僕は多分、誰かのために頑張ることが好きだったんだ。その性格も相まって、100メートル走では自己ベストを出すことができた。

その間、同じ部活で活動していた瀬山くんがちょっとした問題を起こした。夜友達だけで遊びに出かけて、警察に補導されたのだ。友達はあつという間に部活動を禁止された。部活でもいい成績を残していた瀬山く

んだっただけに、僕も部活の友達もみんなショックを受けていた。しょんぼりとした彼の背中に何か声をかけようとして、僕は声をかけることができなかった。

何か、何か、彼の心を和らげるような言葉を、探して、探して、結局見つからないまま。僕は言葉を飲み込んだ。

「あの時、なんて声をかけてあげれば、良かったんだろう」

「今でも.....悔やんでいるの？」

「うん.....どうしてあげれば良かったんだろう」

「過ぎた時は戻らないけれど.....きっと彼はその日のこと忘れちゃうくらい幸せになっていたらいいわね」

「うん.....」

「——ねえ、まーくん。紫陽花を見にいかない？」

母さんがいつもよりもお化粧をして、僕に声をかけた。

本当のところ、僕は溜めた宿題をやってしまったかったのだけれど、母さんがあんまりにもウキウキとしていたので、しぶしぶその誘いにのった。

「きれいねえ」

「ほんとだね」

紫陽花は色とりどり咲いていて、紫にピンク、白、黄緑なんてものもあった。小さな花がキュッと一つに集まって咲いているそれはとても美しかった。母さんは嬉しそうにその花々を見つめ、それから時折僕の顔を見る。僕もまた母の視線を感じながらも紫陽花を見る。特に会話らしい会話はなかったけれど、母さんはとても幸せそうだった。僕はどうして母さんがそんなに幸せそうなのか、それがわからなかったけれど、母さんにたずねて言葉にすると、その幸せが消えて無くなってしまう気がして、言葉を静かに飲み込んだ。

二学期に入り、不登校だった藤堂くんが登校して来るようになった。僕はもともと彼の自宅によくプリントを届けていたこともあり、一緒に登下校をすることも増えていた。最初の登校は慣れない様子だったが、次第に学校にくることに慣れてくると、僕以外の友人と会話をすることも増えた。体育祭に、合唱コンクールが終わった頃には、すっかりクラスに溶け込んでいた。僕は少しホッとしていた。

季節は巡る。風を切って走ると、指先も頬もひどくこごえる。

「稲葉くん、向いていると思うよ」

先生がそう言って僕に生徒会を勧めてくれた。

「どういう仕事なんですか？」

「みんなをまとめる仕事かな？」

「.....やってみたいです」

不安はあったけど、生徒会になってみたいと思った。みんなと笑って過ごすために、何かできないかなとそう考える僕の発想が少しでも役に立てばいいなと思った。

五、六時間目の演説——緊張して、うまく話せなかった。でも、震えながら話し終わったあとに顔を上げたら、クラスのみんなが笑っていた。拍手がだんだんと大きくなる。

「頑張れよ、稲葉！」

「かっこよかったよ」

みんなの言葉が僕を奮い立たせる。みんなのためだったら、なんだってできる気がする。

年が明けて、スキー教室が始まった。同じクラスの不登校だった藤堂くんがこっそりと泣いているのが心配で、僕は彼と過ごす時間が増えていた。

「スキーって楽しいの？」藤堂くんが帰り道、僕に尋ねた。

「楽しいよ、冷たい風がビュンビュン顔に当たるんだ、なんかもうどこまででもいける気分になる」

「稲葉くんくらい、スポーツができたら楽しいんだろうなあ」

「なんもできなくても、さらさらの雪に触れるのも悪くないよ」

「そうかなあ」

「そうだよ、今度一緒に滑ろう」

「.....うん、ありがとう」

藤堂くんは照れたように笑いながら、大きく頷いた。

季節は巡る。深く濃密な時間は風のようにあっという間に過ぎていく。冬が終わって、三月。春はもうすぐそこにあった。

平成二十一年三月三日。その日はひな祭りだった。

といっても、男の僕には無縁のイベントで、街を彩るピンク色の景色をぼんやりと眺めながら、僕は帰宅した。

帰ると、母さんがめずらしくいびきをかいて、眠っていた。

「ただいま、母さん」

返事はなかった。

でも疲れているんだと思った。だから僕は母さんにおいてあった毛布をかけてやり、宿題をしていた。母さんの様子がおかしいことに気づいたのは、それからしばらく経っても目を覚まさず、大きな声で呼んでも返事がなかったからだ。

「母さん……！ 母さん……！」

僕は震えながら、同じマンションに住んでいる母さんの知り合いに連絡を入れた。すぐに救急車を呼んでくれて、僕は母さんの乗った救急車に同乗した。救急車に乗ったのは、これがはじめてのことで、救急隊の人たちに母さんの状況を詳しく聞かれた。泣きそうになりながら、僕はそれに答え、言われるがままに父さんに電話で伝えた。

「母さんが救急車で病院に搬送された」

父さんも焦っているようだった。今まだ会社だから、病院に着くまでに少なくとも三時間以上はかかる。それまで一人、なんとか——泣きたくなる気持ちをぐっと堪えた。今泣いたら、動けなくなってしまうそうだった。大きく息を吸い込んで、肺いっぱい酸素をいれる。大丈夫、大丈夫だ。

「母さん……」

「僕、一人？ お父さん、何時頃にここに到着するかわかるかな」

「今連絡があって、十時前には着くかと思います」

「そうか……わかった。そうしたら、君はここで待ってられるかな？」

「はい……」

父さん、早く、早く。僕は祈るような気持ちで夜空を見上げた。上を見つめていないと、心がぐしゃっと潰れてしまいそうだった。

父さんは、言っていたとおり午後 10 時前に到着した。着くなり、僕の肩をぎゅっと抱くと、すぐに病院の先生のところに呼ばれて、消えた。夜風はまだ寒いのに、父さんの手は燃えるように熱かった。

先生のところから帰ってきた父さんはひどく落ち込んだ様子で、僕はすぐに母さんの状況を悟った。

「……母さん、亡くなったよ」

僕はその言葉に対してなんと伝えればいいのか、先ほどまでぬくかった母さんの温度がもうどこにもない。感情がぐしゃぐしゃになったままでただ小さく身体をまるめて、「うう」と唸っただけだった。

自宅に帰ってきた母さんの身体は、もうすぐ燃えるらしい。

それまでの間、僕は毎日母さんの隣で眠った。昨日まで家族一緒にの寝室で眠っていた。僕はできるだけ母さんと長く一緒にいたくて、身を寄せてまぶたを閉じた。隣の部屋で父さんが泣く声をなんども聞いた。

母さんとの時間はあっという間に過ぎて、告別式が終わった。母さんが燃えた後、僕はなんだか気持ちが悪くなって、その場にしゃがみ込みたくなる気持ちを抑えて、近くのベンチに座る。誰かが声をかけてくれたけど、「大丈夫」と作り笑いをする。母さんが死んでから、泣くのも笑うのも下手になったと思う。感情がうまく出てこないのだ。

骨になった母さんとともに帰宅した頃には、僕の気分はいくらかマシになっていた。

翌日母さんの遺品を片付けながら、父さんが明るく言った。僕と一緒に父さんも多分無理して笑っているんだ。そのことがわかったから、僕も明るく振る舞った。平気だって顔をした。

「これからは父さんと二人だ。さみしければ転校して、じいちゃん、ばあちゃんの家で暮らしてもいいよ。どうしたい？ 転校するか？」

「ううん、大丈夫、ここで暮らすよ」

僕がそう言うと、父さんが少し嬉しそうに笑った。

「そうか……そうか……よかった。父さんもこれからはできるだけ早く帰ってくるようにする。出発も正之に合わせるよう、会社にお願いしているから」

「大丈夫だよ、僕一人で学校行けるよ」

「心配するな、お父さんに任せなさい」

僕の髪をぐしゃりと撫でる父さんの指はかすかに震えていた。

「学校、どうする？ しばらくは休んでも大丈夫だよ」

「大丈夫、明日から学校に行くよ」

父さんの強がりかわかったから、僕も強がった。

こうして、僕と父さんの生活がはじまった。僕の体調が悪い時はおばあちゃんがきて、面倒を見てくれた。逆におばあちゃんの家に行く機会もあった。僕は今まで以上に勉強をするようになった。何かをしていないと、母さんのことを思い出してしまいそうだったから。

ずいぶんと長い冬が終わって、ようやく春が来た。僕は、中学二年生になった。
父さんとはぎこちなさがまだ残っている。これまで母さんと過ごす時間が長かっただけに、母さんを失った僕に対してどう対応するか迷っている部分もあったんだと思う。そのぎこちなさが会話の隅々に感じられた。でも、父さんと過ごす時間が僕は嫌いじゃなかった。

「今日は早く仕事が終わるからご飯を作るよ」

「ありがとう」

「何、食べたい？」

「父さん、何が得意なの？」

「ええと.....何が作れるんだろう」

僕と父さんは顔を見合わせて、吹き出した。僕だって、料理は調理実習くらいでしかやったことはない。家事も、母さんに頼まれたことしかしたことはなかった。父さんは迷いに迷って苦戦しながら、オムライスとオニオンスープを作ってくれた。僕はサラダをちぎって準備をした。

玉ねぎはまだ生で、たまごも硬かったけれど、はじめての二人の手料理。僕らは顔をしかめたり、ケラケラ笑ったりしながら食べた。

「ごちそうさまでした」

「ごめんな、次はもっと上手に作ってみせるよ」

「ふふ、美味しかったよ。でも、期待してる。僕もなんか作れるようにしたいなあ」

「いいんだ、正之は正之らしく、子供らしくしていたら.....」

「.....うん」

父さんは優しい。けど、今までと同じ量の仕事をして、帰ってきて家のことなんて大変に決まっている。本当は無理なんてして欲しくないし、もしも父さんが倒れたら——そんなことを考えたら、また気持ちが暗くなるから考えないようにする。けれど、父さんが無理をしないで済むように、僕も手伝っていきたくと思った。

陸上部で僕は部長になった。自分がなれるなんて思ってもいなかったから、びっくりした。

「今日は遅くなったし、部長になったお祝いに外食をしようか。何が食べたい？」

「うーん」

「なんでも食べたいものを言いなさい」

「チャーハンが食べたい」

僕がそう言うのと父さんは少し困った顔をして、それから笑った。父さんは僕のお気に入り中華ファミレスに連れて行ってくれた。僕はラーメンとチャーハンセットを頼んで、父さんはエビチリ定食を頼む。

「でも.....なんで僕が部長になったんだろうって思うんだ」

「どうしてだ？正之がふさわしいということだろう？」

「でもね、父さん.....僕よりももっと足が速くて、リーダーシップがある人間がいるんだけど.....それに彼のほうが僕よりも部長になりたかったと思う」

「でも、正之が選ばれたんだよ。期待をされているということだから、その期待に応えないといけないんじゃないか？」

「先生にも同じこと、言われたよ」

僕らはあっという間にラーメンとチャーハンとエビチリを平らげると、追加で杏仁豆腐を注文して、それもすぐに食べてしまった。食事を終えて、二人でマンションに帰る途中、父さんがピタリと足を止めた。

「どうしたの？」

「いや.....好きだったなと思って」

父さんの視線の先に紫陽花の花が咲いていた。

「母さんのこと？」

「そうだよ。正之が生まれるずっと前にも行ったことがあるんだ、二人で。紫陽花が綺麗に見える公園があったね」

「それって.....」

頭の中に浮かんだのは、母さんと一緒に見た紫陽花。色とりどりの花々。紫にピンク、白、黄緑なんてものもあった。母さんは嬉しそうにその花々を見つめ、それから時折僕の顔を見る。僕もまた母の視線を感じながらも紫陽花を見る。

——きれいねえ。

母さんの幸せそうな顔。

「あ.....」涙が自然と頬を伝った。

「正之！？ どうした！？」

「違う、違うんだ。思い出したんだ。母さんと紫陽花を見に行った時のこと。母さんがすごく幸せそうで.....あれって、多分父さんと紫陽花を見に行った時のこと思い出していたのかなって.....」
父さんはとても驚いていたが、僕の言葉を聞いて、あっけにとられていた様子だった。その瞳が次第にゆらりと揺れる。じわり、じわりと涙が浮かぶ。
「そうか.....正之が.....一緒に行ってくれたんだな。よかった。いつか一緒に見に行く約束をしていたんだ、律子と。紫陽花の花を見ようって。でも.....できなかった.....そうか、正之と一緒に.....」
僕は父さんの涙を見て、じわじわと涙がにじむ。涙をこらえようとすればするほど、溢れ出す。僕は中華ファミレスの外でわんわんと子供のように泣いた。それは、僕が母さんが亡くなってからはじめてこぼした涙だった。
その日を境に父さんとの距離はさらに近くなったような気がする。前から家族であったことに変わりはないけれど、より家族としてなんでも相談しあえる関係になった。父さんがどうだったかはわからないけれど、少なくとも僕は父さんを信頼するようになっていた。

「へえ、お父さんとはいい関係だったんだ？」クロチが僕の言葉にはいる。
「うん.....この頃から、特にそういう気持ちが強くなったと思う」
「へえ、そうなんだ」
「かつこいい人だったんだ。優しくて、みんなを導いてくれるような.....そんな人。尊敬していたよ」
「ふふっ」
「なんで、笑うの？」
クロチが僕を指差した。「だって、まるで君のことを言っているみたいだったからさ。優しくて、みんなを導く」
僕は空を仰ぎ、それから小さくうつむいてふっと笑ってしまった。
そうか、僕はずっと無意識に父さんの真似事をしていたのかもしれない。優しくて、家族を導いてくれる父さんの背中をいつも見ていた。背中はずかしくても、まぶしかった。
「.....なるほど、考えたことないけど、そうだったのかも」
「さて。で、君は中学校を卒業してどうなっていくのかな？」
「じゃあ、もう少し話を聞いてくれる？」
「もちろん、まだまだ時間はあるよ」

平成二十三年三月——中学校の卒業式の日。
去年僕ら生徒は宿題として、一年後の卒業式の日自分に宛てた手紙を書いていた。僕は自分が書いたその手紙を開いた。

これを書いたこと覚えていますか？
この1年間いろいろあったと思いますが、何が思い出に残っていますか？
陸上はどうでしたか？
1年生はたくさん入ってきましたか？
県大会には行けましたか？
ちょうどこの手紙を読んでいる時に何を考えているか分らないですが、高校でも陸上を続けてください。
高校はどうしていますか？
これから何があるか分らないですが、とりあえず勉強頑張ります。
おまえ卒業すんだよ？ 分かっているの？
とにかく1年間たくさんあったと思うけど、頑張ってください。
今でも友達を大切にしてください。

父さんに見せると、父さんは笑っていた。
今の僕はちゃんと高校も決めて、未来に進んでいる。学級委員も、陸上部部長も、歌会会長として音楽会で指揮も、全部やり切った。友達も、家族も大切にしていこう。そう、強く思った。
卒業式の日、見に来てくれた父さんに宛てて、手紙を書いた。

父さんへ

今まで、僕を育ててくれてありがとう。
母さんが亡くなった時、僕のために母さんの代わりになろうと懸命に頑張っていた姿が印象に残っています。

今まで家のことは母さんにすべて任せていた父さんにとって、この二年間、本当につらくて苦しかったと思います。

仕事が大変なのに、僕のために家事をこなして、朝食も夕食も作ってくれて、洗濯や食器洗いをしてくれたこと……。

今まで、家に帰れば夕飯が作ってあって、朝起きれば朝食を作ってくれることが当たり前だと思っていました。

でも、父さんが時間を割いて家事をしてくれたことで、当たり前のように感じていた自分が悲しく感じました。

本当は今日まで「母さんがいたら……」と思うことも何度もありました。でも、僕が今日中学校を卒業できるのは、父さんのおかげです。この二年間、本当に感謝しています。

僕は父さんが父さんにしかできない仕事をしている姿が好きでした。そんな父さんがいることを誇りに思うし、心のそこから僕は父さんを尊敬しています。

高校は母さんの実家から通うことにしたのは、僕自身の都合もあるけれど、父さんがもっと仕事に集中できればいいと考えたからです。でも本当にそれが正しい選択なのか、今でも分かりません。

わかっていることは、僕にとっての親は父さん一人です。仕事、頑張ってください。父さんのことを応援しています。

正之

父さんが僕のために頑張ってくれていることが心のどこかで苦しかった。もともと仕事熱心な人だったから。母さんが亡くなってから、僕と父さんの距離はぎこちなく、でも穏やかにゆっくりと近づいていった。これ以上、父さんの迷惑にならないように。父さんが自分の人生を生きられるように。僕は父さんのもとを離れる決心をした。

「父さんのこと……本当に尊敬していたんだ」

僕はぼそりとそんな言葉をこぼした。この白い宙を見上げ、僕は自分の胸のあたりがほんのりとあたたかくなっていることに気づく。クロチがそっと僕の胸に顔を押し当てていた。僕はそっとクロチを抱き締めて、自分の膝の上にのせてやる。まるで子供のようだ。いや、子供なのだけれど。

「続きのお話をして」

「ここからはあつという間だよ」

「かまわないわ」

「わかった」

僕は父さんの元を離れて、高校に入学した。

学校は毎日大変だったけれど、勉強も部活も必死に打ち込んだ。それが、父さんとの約束だったから。

おばあちゃんは、そんな僕にいつも優しくしてくれて、次第にこの生活にも慣れていった。

僕は、希望の大学を決め、そしてその大学にも合格した。

彼女と出会ったのは、大学に入ってからだった。

新藤花澄。その名前のとおり、花のように清らかで美しい女性だった。僕よりも三つ年下の彼女に出会った瞬間、恋に落ちていたんだと思う。

「正之先輩」

そう彼女に呼ばれるだけで、たまらなくくすぐったい気分になって、有頂天になった。同じサークルに入った彼女と距離が近くなるまでにはそう長くかからなくて、出会って二か月が経ったある日、僕は彼女をデートに誘った。

「嬉しかったです、デート」

「僕も楽しかった」

「また、デートしてくれますか？」

「え、また誘っていいの？」

こくりと花澄は恥ずかしそうに頷いて、それから小さく笑った。翌月、僕から彼女に告白をして、僕らは付き合うことになった。僕はたくさんの友人に恵まれ、それから彼女との出会いも果たした。大学生活は本当に充実したものだった。父さんは仕事で忙しかったし、僕も大学生活で手一杯だったので、なかなか会う機会はないけれど、それでも時々父さんは僕のところにやってきて、声をかけてくれた。

「大学の方、順調か？」

「うん、毎日楽しいよ、勉強もバイトも大変だけどやりがいがある」

「そうか……楽しいなら、それでいいんだ。母さんもきっとそれを望んでいたと思うよ」
「そうかな」
「そうだよ、無理はするなよ。お前らしくやればいいんだから」
「ありがとうね、父さん」
「ああ、また落ち着いたら、飲みに行こう」
父さんは会うたびに僕と飲む約束を取り付けては、互いに忙しく流れてしまう日々が続いた。

楽しい時間はあっという間で、僕は就職を迎えた。どこに就職するか心底迷ったけれど、最初に内定をもらった仙洞運輸に就職を決めた。
ここで彼女や友人たちとは離れ離れになってしまうわけだけれど、職場はみんなそれほど遠くなかったから、これからも遊びに行こうと約束をする。新藤花澄—彼女とは、プロポーズをする約束をした。けれど、今の自分はこれから働きはじめるばかり。仕事がある程度落ちついて、慣れてきたら、プロポーズをすると伝えた。
彼女はひどくうろたえて、驚いていたけれど、でも嬉しそうに涙を流しながら深く頷いてくれた。

就職して、一日目。初日はオリエンテーションと研修会。同期は僕と同年の人が何人かいて、少し心強い。話はわからないことばかりだったけど、帰ったら復習をしてしっかり学んでいきたいと思う。ここが僕の職場なんだから。
就職して、一か月が経とうとしていた。正直しんどいことの方が多いけれど、現場のパートさんたちは僕に優しくしてくれる。

「稲葉くんと同年くらいの子供がいるのよ、だから頑張ってね」
「厳しいことばかりだろうけど、頑張れよ」
皆さんの言葉があるから、僕は頑張っていこうと思える。それに今日は給料日。
使い道はとっくに決めている。亡くなった母さんのために、仏壇に供える綺麗な色の数珠を。おばあちゃんには、あたたかいセーターを、それから父さんには、ネクタイピンをプレゼントした。みんな喜んでくれてとても嬉しかった。特に父さんの反応といったら。
「ありがとう、本当に嬉しいよ。正之が一人前になったってことだもんな。」
父さんはなんだか泣き出しそうな顔で、僕の目をまじまじと見るから、僕はびっくりしてしまって思わず顔をそらしてしまった。あの日、父さんが喜んでくれたこと、本当に嬉しかったんだ。
「今度こそ、本当に飲みにいこうな—」
ああ、そうだよ、父さん。今度こそ、飲みにいこうね。父さんがずっと楽しみにしていたんだもの。

ああ、だけど、身体がだるい。ひどく疲れた。
—そして、世界が暗転した。

「……どうしたの？」クロチが暗闇の中でたずねる。
「えっと……どうしたんだろう」
「なんで、こんなに暗いのかしら」
「わかった」
「え？」
「そうだ……僕、死んだんだ」
思い出した。そうだ、僕は死んだ。六月の霧雨降るこの日に。

【第2章】

「思い出した……？ 君がここにきた理由」
クロチが僕の目をまっすぐに見つめて、そうたずねた。
「死んだ……から？」
「そうね」
「どうして死んじゃったんだっけ、僕……死んだことは思い出せたけど……」
「わからない。忘れちゃうくらい、苦しいことだったのかもね。無理に思い出すことはないのかもしれないわ」
「あっ……父さんは……？ 大丈夫なのかな、僕がいなくて」

不意に父さんの顔が浮かぶ。父さんは僕の死をもう知っているのだろうか、もし知ったとして父さんは大丈夫だろうか。一抹の不安がよぎる。クロチは優しく微笑んで、僕の髪を撫でた。

「優しいのね、君、死んだっていうのに……」

「父さんが心配なんだ」

「なら、見に、いってみる？」

僕が深く頷くと、クロチが僕の手をそっと握った。

「手を、握っていてくれる？ そうすれば、君の姿は誰にも見られないから」

「離すと誰かに見えるの？」

「一部の人だけにね。でも、霊の存在を感知されたら、その時点で霊はその場にとどまることができなくなるの。この場所に戻されて、もう二度と地上を見ることはできない」

「わかった」

僕はクロチの小さな手をぎゅっと握った。心なしか、彼女の手が震えているような気がしたけれど、もしかすると震えているのは僕の方かもしれなかった。

「いこう」

「ええ、苦しくなったらいつでも戻ればいいんだからね」

「うん、大丈夫だよ。それより、急がなきゃ。父さんのことが心配だ」

「わかったわ」

僕らは手をぎゅっと握り直す。クロチの身体がふわりと浮いたかと思うと、真っ白な空間を突き抜けて、ゆらゆらと空を飛んでいる僕らがいる。彼女の手にはひかれるままに、まっすぐに僕らは地上を目指す。住み慣れた街、よく行った駄菓子屋さん、怪我した時に絆創膏を買った薬局、父さんの誕生日ケーキを買ったケーキ屋さん、近くのスーパーは看板が変わっていた。

「もう着くわ、大きく息を吸って、ゆっくりはいて」

「うん」

僕は、僕の家 にいた。父さんの家、僕の自宅。

《令和三年 六月三日》

「——正之！？」

父さんの声が聞こえた。クロチが僕に目配せをして、自宅に入り込む。透明人間のようなものになった僕は、床にうずくまっている僕の身体を揺さぶっている父さんを見た。僕の首には紫色の跡がびっしりとついている。そばに真っ赤なネクタイが落ちていた。顔の色も薄暗い。唇からは舌が飛び出し、唾液が流れ落ちている。時計は午後1時半をさしていた。

「正之、どうしたんだ……！ 正之、起きろ！ 正之、正之、正之——！」

父さんは僕の名前を繰り返し呼びながら、人工呼吸を行う。救急車と警察を呼んで、人工呼吸を続ける。10分が経った。呼吸は戻らない。冷たくなり、すでに死後硬直がはじまっている僕の身体にそれでもまだ人工呼吸を続けた。

「もうダメだよ……父さん。僕、死んだんだ」

思わず、父さんに声をかける。返事はない。

「聞こえてないわ、私たちの声は聞こえないの。」クロチがぼそりとこぼした。

やがて救急車と警察がやってきた。心臓マッサージをしたが、その場で僕の死亡が確認されたようだった。父さんは呆然とした様子で警察の事情聴取を受けていた。

「ええと……今日の午前11時50分ごろに、正之が勤務する仙洞運輸から私の携帯に連絡があって……それから……正之が出勤してなくて、携帯も繋がらないと……言われまして……私は慌てて、自宅に……その時にはもう……」

しどろもどろで話す父さんは、いつもの仕事ができる父さんからはずいぶんとかけ離れていた。

「すみません、正之さんのカバンはこちらですか？」警察官が父さんに聞いた。

「ええ、多分そうだと思います。いつもそのカバンで通勤していました。」

「そうですか」

「何か入っていましたか」

「ええ、診断書が入っていました。正之さんはメンタルクリニックに通われていたようですね。」

診断書には難しい言葉がずらずらと並べられている。『抑うつ状態』と書かれていた。

父さんは驚いた顔をして、その文字をじっと見つめている。おろおろとしながら、電話を取り出し、父さんはおもむろに電話をかけだした。

「——はい。仙洞運輸の遠山です。」

「先ほどお電話をいただいていた、稲葉正之の父ですが。」

「ああ、お父さん……」

「正之は自殺しています。一体、あなたたち何をしていたんですか」
電話の向こうの遠山がうろたえているのがわかった。僕はその声を聞いただけで、肩にぎゅっと力が入る。嫌な思い出がじんわりと頭の中でフラッシュバックする。じわりと冷や汗がにじむ。頭がクラクラとする。
「大丈夫？ 正之くん」クロチが僕の手をぎゅっと握る。
「大丈夫、大丈夫だから……」僕はその場でなんとか体勢を整えなおすと、父さんの方を見た。
「わかりません、こちらは何も知りません」
「もういい。もういいです。警察の検死が入ります。また落ち着いたら連絡を入れます。」
父さんが勢いよく電話を切った。父さんの顔は紅潮していた。
「こちら、遺書のようなですね」
リビングのテーブルに置かれている遺書を警察官が父さんに手渡した。遺書の文字はかすかに震えている。父さんの遺書を持つ手もひどく震えていて、僕はその顔から目をそらした。歯を食いしばって、今にも泣き出しそうな顔をしている父さんの顔を僕は見るができなかった。

遺書

突然のことではあります、自殺をすることにしました。
この後、皆様にどれ程ご迷惑をお掛けすることになるのか重々承知した上での選択です。
あまりに身勝手な言い分であり到底許されるとは思いません。本当に申し訳ありません。

会社の皆さま、営業所の皆様には、何の弁明もできません。何一つ責任を取ることなく身勝手に逃げてしまい本当に申し訳ありません。体調を崩して以降、皆様が心配して下さり作業負担を軽くして頂いたり、声を掛けてくださったことに大変感謝しております。ケジメもつけず乱雑な状態のままであることも申し訳なく思っております。このような状態で仕事が続けられたのも皆様のお陰です。立ち直ろうともせずこのような形で後々までご迷惑をお掛けしてしまうこと、無責任さと身勝手に謝っても謝りきりません。所長をはじめ職員の皆様、事務所の皆様、現場の皆様、大変申し訳ありません。
何故自分を変えようとせず自殺をしたのか、正直なところ自分でもよくわかりません。ただ、今は、自分が怠惰であること、周囲を見られず先のことも考えられず、暗く重く苦しいです。甘えなのは分かっているにもかかわらず、変わろうとしない自分に対して、今度のような選択をした次第です。今回このような自分の行動に至ったのは、ひとえに自分の問題であり自分の意志です。今までご迷惑とご心配をお掛けした皆様、本当にありがとうございました。そして、あまりに身勝手な選択をしてしまい、本当に、本当に申し訳ありません。

父さんへ

何の報告もなくいきなりこのような行動に至ったこと、本当に申し訳なく思っております。
自死願望が去年から出てきた時、何度も思い止まることができたのは父さんやばあちゃんのことを考えてきたからです。結果としてこのような選択をしてしまった訳ですが、支え続けてくれたことに大変感謝しています。絶対に自分を責めるようなことはしないでください。
思えば、母さんが亡くなって以来、自分のために家事も仕事もこなしてくれたことに対して何の恩返しもできませんでした。自分が就職してから朝食や夕飯、洗濯まで任せてしまっただけで申し訳ありません。ここまで自分が生きてこられたのも父さんのお陰に他なりません。本当にありがとうございました。
気がかりな一つがばあちゃんです。小さい頃から可愛がってもらい、高校3年間は一緒に暮らし、大変お世話になりました。今もばあちゃんに会いに行く度に元気を貰い、その度に、自死を思いとどまってきました。また会いに約束をしていたのに、突然今回のような話を聞いて耐えられるか不安です。どうか自分の分まで生きて楽しみを見つけて欲しいと今は思っています。
書いていて、父さんとの色々な思い出がわいてきます。そこまで会話が長くはなかったのですが、一緒に時間をリビングで過ごしたことが幸せでした。父さんを一人にしてしまうことがただただ申し訳なく思います。また、友達や彼女から連絡がくるかもしれません。自分自身、どうしたら良いのか分かりません。今までの感謝と、次に会うことができなくなったけれど、自分も残念であると伝えてもらえればと思います。話したいことは山ほどありますが、自分のことを時たま思い出してくれたら嬉しいです。葬儀に関してはなるべくひっそりとして行ってもらえるとありがたいです。
伝えたいことは沢山ありますが、ここまでにしたいと思います。田植えと稲刈りをちゃんと手伝えなくてごめんなさい。もし、もしあの世があるのなら皆のことを見守っていきます。また、どうか、どうか自分の分まで長く生きて人生を楽しんでください。今まで本当にありがとうございました。

「正之……どうして……」

父さんはそのまま膝から崩れ落ちた。

僕は父さんを抱きしめようとして、自分の手が父さんの身体をすり抜ける瞬間を見ていた。

「ごめんなさい、父さん」

僕の声が聞こえることもない。もう二度と、触れることもできない。もう何も。

それから、父さんが親族に電話をいれているのをただ見ていることしかできなかった。

父さんは時折、言葉に詰まり、苦しげに僕が亡くなったことを伝えては電話を切るという行為を繰り返している。彼女の新藤花澄にも連絡をいれてくれた。電話の向こう、彼女がただ押し黙っているのがわかった。

夕方には連絡を受けた人たちが自宅に集まり、それから検死が終わった僕の遺体を引き取りに父さんは向かった。遺体はマンションのエレベーターの都合上、自宅には入れることはできず、葬儀場に置かれた。

父さんはぼんやりとした視線で夜空を仰ぐ。まだ蝉も鳴かない六月の空はかすかに重く湿気が多い。少しだけ夏の匂いがしている。六月三日——それが僕の命日だった。

《六月四日》

翌日の朝方に父さんは自分の会社にしばらく休暇をもらう連絡を入れた。

午前10時になると、僕の働いていた仙洞運輸から花田人事部長と事業所の遠山課長がマンションにやってきた。遠山課長は伏し目がちに父さんに声をかけて、二人は頭を下げた。

「このようなことになり、言葉を掛けようがありません……」

「一体、会社で何があったんですか。首を吊って自ら命を絶つということは尋常ではありません。警察の調査でも、息子の荷物から診断書が発見されています。「抑うつ」とありました。会社には提出していたんですか？」

父さんが怒りをぐっところえ、言葉が震えていた。

「いいえ、提出されていません。精神科医に通院していることは知っていましたが、身体の調子が悪いということで仕事量を減らしてはいたのですが……正之君に休職してはどうかと聞いたこともありましたが、彼は大丈夫だから通勤しますということで様子を見ていました……」

「私も通院していることは知っていました。大丈夫かと何度も聞いて、でもいつも大丈夫だと言っていたんです。私は……正之を助けてやれなくて、可哀想で、悔やんで悔やんでも悔やみきれません。ですが、ここで、お二人を責めても正之は帰ってこない……ただ、こんなことになった原因究明とその対応策を講じていただければと思います。」

父さんの拳がひどく震えている。二人はただ小さくうつむいて「はい」と返事をしただけだった。

午前11時頃、葬儀場にある僕の遺体を親族が囲んでいた。

「まー君、起きろ。起きろ、まー君」お祈りのような言葉を僕の遺体に向けて、つぶやく従兄弟。

「苦しかったのか、助けてやれんくてごめんよ」

「まーちゃん、ばあちゃんだよ。まーちゃん」ばあちゃんが僕の遺体に声をかける。

「正之、正之」父さんが僕の名前を呼ぶ。

その場にいたみんなが僕の遺体を見て、泣いていた。

そのあとは次々と人がやってきた。

彼女——新藤花澄もやってきた。

「正之君……」

彼女は僕の顔を見るなり、わあっとその場に泣き崩れた。僕の身体にしがみつки、僕をゆする。

やがて、僕の身体は自宅に戻ると、また友人たちがやってきてくれた。友人たちはみな泣きながら、僕の身体を撫でた。

「入社して一年目はいい会社に入ったと言っていたんです。でも少し前に会った時は、すごく仕事が辛いと言っていました……あの時、もっと詳しく話を聞いていれば……すみませんでした。」

友人の瀬野祐介が言った。

そういえば、瀬野とはそんな話をしたなと思い出す。

「多分、あいつは隠していたんだと思います。周りのことをよく考えているやつだから」

「そうだったんですか…正之はそんな話なかなかしてくれないものだから。」

「誰に対しても、明るくて、優しく、まぶしいひだまりみたいな友達でした」

「ありがとう。きっと正之もいい友人を持つことができて幸せだったと思います。正之が死ぬ間際、何を考えていたのか……私も詳しく調べてみようと思います。」

父さんは深々と瀬野祐介に頭を下げ、瀬野祐介もまた深くお辞儀をした。

《六月五日》

夜は僕の遺体の隣に父さんやばあちゃんが横たわって眠りについた。ばあちゃんは、僕の髪をずっとずっと撫でてくれていた。父さんは泣きながら、額と頬を撫でた。

その日の昼――僕の身体は出棺し、通夜が行われた。

住職の積木さんは、母さんの通夜やそのあとの法事でも何度か顔を合わせた。優しく、穏やかな人だった。

21時に散会した後も、父さんは一人葬儀場に残り、香を絶やさず、僕の寝顔を見守り、そのまま夜を明かした。

《六月六日》

午前11時から、告別式が執り行われた。

「昨日の通夜式、本日の告別式には沢山の方々にご焼香を頂きました。厚く御礼を申し上げます。突然のことであり言葉もございません。涙は枯れることなく流れます。息子正之は、この世に生を受けて、地域の皆様、幼稚園、小中学校では、沢山の友人・恩師の方々によくして頂きました。中学1年で母親を病気で亡くしてから、皆様方に温かく見守って頂きました。昨日と本日、遠いところをこのように沢山の友人の方々の参列を頂きました。私には過ぎた息子でありました。親子二人、男同士で会話はあまりしませんでした。遺書に、父さん、僕の分も長生きしてくださいとありました。私の生きる希望であり、全てでした。この先何を目的に生きてよいのか分かりません。今はただ、正之よ、お前は誠実に一生懸命生きた、こんなに多くの方が参列して下さったのが何よりの証拠だ。必ず、必ず正しく懸命に生きたことを証明してやるからな。そのように言葉をかけてやりたいと思います。本日は誠にありがとうございました。」

父さんは告別式で顔を上げて、震える指先をぎゅっと握りながらスピーチをしていた。

式には50名ほどの人間がやってきて、僕の遺影を見つめながら、泣いていた。

夕方、父さんは一人で僕の遺骨を抱えて、帰宅した。どんな気持ちを感じていたのか、父さんはうつむいていたので表情は見えなかった。

夜になると、やってきたのは意外な人間だった。

仙洞運輸のパート従業員の春川さんと香田さん。二人には、仕事がつらかったときにとってもお世話になった。僕の自宅に近かったようで、線香をあげに顔を出してくれたようだった。

「突然、お邪魔して申し訳ありません」

暗い顔で二人は頭を下げる。父さんは、首を横に振ると、自宅に招き入れ、僕の額縁の前に案内をしてくれた。

「パートの人たちによくしてもらっているという話は聞いていました。生前、ありがとうございました」

僕の代わりに父さんが頭を下げた。

「いえ.....課長から正之君が亡くなったと報告がありまして。パートの皆は涙を流していました。正之君は.....他の社員の人たちと違い、私たちに挨拶をして、優しく接してくれました。むしろ、よくしてもらったのはこちらの方ですよ。」

春川さんが言った。

「職場では正之はどうでしたか？」

「忙しくて、食事を十分に食べないで、仕事に向かうこともあったかと思います。体調が悪いことを知っていたので、しっかり食べないとだめだよと伝えました。でも.....そうですね、体調が思わしくなくとも、私たちに對する接し方は変わりませんでした」

「そうですか」

「それと.....」話かけた香田さんがおし黙る。

「それと？」

「パートの人たちは事務所の中にはなかなか入れないのですが、閉められたドアの外でも聞こえるような大きな声で正之君が叱責されているのを聞いていました。そういうことが.....いわゆるパワハラのようなものが.....重なって、体調が悪くなったんじゃないかなって.....」

「そうですか。会社には原因究明をお願いしております。調査があった場合には、是非とも協力をお願いします」

「もちろんですよ。私たちは、正之君の味方ですから。」

春川さんと香田さんが顔を見合わせ、力なく微笑んで、頷いた。

父さんは二人にもう一度深く頭を下げた。

父さんはPCのあるデスクに腰をかけると、PCを立ち上げ、ぼつぼつと文章を打ち始めた。

「若者よ、生きよ

六月三日に自らの命を絶った二十五歳の若者の父です。

中学一年で母親を病気で亡くし、それから十三年、父親に全く負担を掛けず、中学、高校、大学で友人に恵まれ明るく正しく生きてきた息子です。

お通夜、告別式には小、中、高校の友人、大学の教授、サークルの仲間五十名以上に会葬を頂きました。息子との日々は楽しかった、助けて貰った、百名に及ぶサークルのリーダーを務めてくれた等、心温まるお言葉掛けて頂きました。サークルの仲間五年間もお付き合いを頂き将来を約束した優しいお嬢様がいたことも知りました。

親ばかかも知れませんが、そんな息子が何故逝ってしまったのか。深い心の闇は何だったのでしょうか。会社にはこのようになってしまったことの原因究明と二度このようなことにならないよう、その対策を講じることを要求しています。

お父さん、先に逝ってしまうことを許して下さい。育ててくれてありがとう。僕の分も長生きして下さいとの遺言です。正之よ、お前は俺の最愛の息子であり、希望であり、全てだぞ。

どうしてその言葉を掛けてやれなかったのか。悔やんで悔やんでも悔やみきれません。

涙は止め処もなく流れます。希望を失って何を明かりに生きていけばいいのでしょうか。

父さん生きよとは、僕のような若者をひとりでもいいから救えとの息子の遺志ではないのでしょうか。その導を見つけるために投稿した次第です。

悩める若者よ。

苦しみを一緒に分かち合おうではないか。隣にはかならず君を愛している人たちがいるぞ。

語り合って暗い闇の中から一筋の光明を見つけようではないか。若者よ、生きよ」

父さんは新聞社にその文章を送ったようだった。

それから、力なくしな垂れ、ぼんやりと宙を見上げた。

「.....正之」

僕の名前をぼそりと呼ぶ。

【第3章】

《六月七日》

前日に送った父さんの文章が、新聞に載ることはなかった。

午後から、父さんは瑞木総合法律事務所に向かった。これまでも何度かお世話になったことがある弁護士、瑞木先生と綿矢先生が出迎えてくれた。柔らかく、穏やかな口調が印象的な先生たちだ。

父さんは、僕の自殺の件や仙洞運輸の内部事情に関して話をした。瑞木弁護士と綿矢弁護士は、静かに父さんの話を聞いていた。

「パワハラの実事実究明と労災申請を求めていると思っておりまして.....訴訟も検討はしています。」

「まずは、事実関係を明らかにすることが大切です。事実関係の調査を進めましょう。」

父さんは事務所を出た後、僕が受診していたあおばメンタルクリニックに連絡を入れた。六月十四日に予約が取れたようだった。

《六月八日・九日》

父さんは僕の遺品整理をしていた。

クリアファイルに収められた会社関係の書類、幕末、維新の歴史書・小説、美術関係書籍が山積している。父さんはその整頓されているとは言い難い物の中から、会社関係書類だけを集め、日付ごとに仕分けをしていく。

「これは開けそうにないな」

僕のPCのパスワードは分からなかったようで、どこかに依頼をしたようだ。

《六月十日》

連日、遺品整理が続く。

インターホンが鳴ったかと思うと、新藤花澄がやってきて、部屋の片付けを手伝っているようだった。

「七月には旅行に行く予定だったんです。」

ポツリと彼女がいった言葉。彼女は涙を瞳いっぱい溜めながら、小さくうつむいていた。父さんが慌てて、彼女にタオルを渡してやる。

「私も.....彼のことに気づいてあげられなかった.....」

そこで会話は途切れた。二人は黙々と作業をしているだけだった。

《六月十一日》

「あ……」父さんが一枚の紙を手にとって、止まっていた。

それはストレスチェックの結果通知表だ。職場環境によるストレスが5段階で4点と高い。ストレス反応に影響を与える因子としては上司からのサポートが5点と最高点を示していた。

『あなたはストレスが高い状態です。高ストレス者に該当します。』

そんな文章が目に入り、父さんは静かに息を吐いた。

歯をぐっと食いしばり、ストレスチェックのリストを仕分けボックスに入れた。

昼からは、僕の自動車の名義変更と駐車場の名義変更を行なった。淡々と作業をこなす父さんは、時折ふっと力が抜けたようにぼうっと空を見上げる。

《六月十二日》

午前中はいつものように遺品整理を済ませ、午後から父さんの知り合い二人と合流して、あおばメンタルクリニックに向かった。

主治医は青葉先生という、品の良さそうな、笑顔の綺麗な先生だった。

先生は父さんが入ってくるのを見ると、困ったような、悲しそうな表情を不意に浮かべたが、すぐにいつもの表情に戻す。

「稲葉正之さんは、計8回の診察があります。私と別の先生が何回かずつ担当していました。診断書は私の診察結果です。」

「仕事に関してはどのようなことを申したいでしょうか」

「思うように仕事がうまくいかなくて、悩んでいるようでした。通勤前には緊張感があり、身体の状態が悪くなってからは、仕事量を減らしてもらったと仰っていましたね。最終の診察日には、状態が良くなってきていて、意欲が出てきたので、仕事の内容は元に戻してもらったと言っていました。ですから、改善に向かっているなという印象だったのですが……私から見ても、まじめな方で、人間性は好感のもてる青年という感じでした。」

「遺書には、誰のことも、会社のことも悪く言っていないのですが、一般的にそういうものなのでしょうか？」

「それは、なんとも言えませんね…」

同席した父さんの知り合いが矢継ぎ早に青葉先生に質問をしたが、先生は焦る様子もなく、あの日のようにゆったりとした口調で返事をした。父さんはカルテの写しをもらいたいと依頼した。

「何かあれば協力させていただきますので、遠慮なくご連絡ください。」

「ありがとうございます。」

父さんは帰宅し、カルテのコピーに目を通した。

稲葉 正之（男）（25歳）

2021年1月23日

SDS 計64点 うつ病（53～）

入社から1年以上が経つが、難しくない仕事もうまく進められず申し訳ないと感じている。自分から積極的に勉強しなかったことも影響して、と本人は述べる。

2020年夏頃から倦怠感や貧血のようにふらっとする感覚が出現した。同年秋頃には気分の落ち込み、中途覚醒、食欲低下などが出現した。休日は出かけても気分が乗らず、趣味だった読書も文章が頭に入らないためしなくなり、ボーっと過ごすようになった。仕事も余計に時間がかかるようになり、些細なミスが増えた。また職場で焦った際などには動悸がするようになった。2021年1月中旬に嘔気がしたため会社を休み、業務量を減らしてもらった。これがきっかけとなり精神科の受診を希望して来院した。

症状：抑うつ気分、意欲の低下、思考制止、集中力低下、不安、倦怠感、めまい、動悸、中途覚醒、食欲低下、自己評価の低下

診断名：うつ病

2021年2月6日

ちょっと体が軽くなったかなと思うが、あんまり実感としてはない。まだめまいやや吐き気、頭痛がある。仕事量を減らしてもらっているの、今の仕事は負担があるとかはない。

2021年2月20日

体調はだいぶ良くなってきた。めまいもおさまってきている。頭がぼーっとしていたのがスッキリしていた。

内服開始して腰や背中痛みがかなり良くなった。

2021年3月6日

そんなに感覚としては変わらない。吐き気はない。めまいはまだある。食欲はあまり変わらない。元の体重より 1.5Kg 減っている。仕事を減らしてもらっているので、今のところ問題はない。焦りみたいなものがある。

2021年3月27日

なんとなく体調も良くなってきた感じがする。緊張すると吐き気は出る。

2021年4月10日

症状は改善してきている。仕事は上手くいかなかったので少し考えると吐き気がある。会社では緊張しやすい。

2021年5月1日

もともと調子が悪いと感じた時のめまいは改善されている。身体は改善している。仕事がうまくいかなかったことを考えると吐き気ある。会社には行っているが、緊張しやすい。

2021年5月29日

前回と変わりなし。仕事も徐々に増やしている。考える仕事は難しいとのこと。

2021年6月3日

警察より連絡あり。本人が亡くなった。自殺の可能性。

淡々とかかれた文章には感情はほとんど読み取ることはできなかったが、それでも父さんに見せていた僕の顔とは随分と違うものだったのだろう。父さんは、カルテのコピーをそっと抱きしめて、僕の名前を呼んだ。

《六月十四日》

父さんは、朝から身なりをきっちりと整え、鏡の前でネクタイを締め直した。午前10時ごろ、仙洞運輸の僕の働いていた事業所に顔を出した。

遠山課長が父さんの対応をする。

「どういったご用件でしょうか？」

「本日伺ったのは、既にお伝えしたことを再確認していただくのと、息子の職場を見ておきたいと思ひました。」

遠山課長の表情が硬い。

「当事業所の社員は、情緒不安定の状態でまだ調査できておりません」

「そうですか。今週、仙洞運輸の東京本社に伺う予定です。本社においても、同じことをお伝えするつもりです。」

「ご、ご子息の勤務時間記録をみると残業時間は少ないです。1月に体が不調であること知り、仕事量を減らしてもおりました。昼食時間になっても机に向かっていることがありましたが.....声をかけると忘れていたと言っていたようです。」

「私が知りたいのは、そのようになった原因です。本社の調査で明らかにしていただきたいと思ひています。」

遠山課長の顔がだんだんと血の気が引く。父さんはそんな課長にも頭を下げて、職場を後にした。

その足で、父さんの勤務先に出社し、詳しい事情と休みの延長を伝えたのだった。

《六月十六日》

遺品整理が続く。その日の夕方自宅に訪れたのは、仙洞パートナーズの常田さんだ。仙洞パートナーズは仙洞運輸の子会社で、同じ事業所で働いている。

父さんは驚いた様子で、常田さんにお茶を出す。常田さんは深々と頭を下げて、焼香をすませると、仏壇に置かれている僕の写真をしばらく見つめていた。彼女の持ってきた優しい花の香りがする。

「本日はお花をありがとうございます」

「いいえ.....実は私、正之君がこんなことになって気持ちが不安定で仕事を休んでいるんです」

「本当はくる資格もないと思っていたのですが.....主人からはそれは明らかなパワハラだから、お花をあげて焼香して正之君のお父さんに話したほうが良いといわれて来ました。」

常田さんがぎゅっと拳を作って、うつむいた。

「詳しくお話伺いできますか？」

「はい.....職場は、一番下の階に受付の事務所があり所長と上席のマネージャーと事務員さんがいます。正之君は、上の階の事務所にいて、仙洞運輸の社員数名が机を並べています。私たちはパートなので特別な用事がない限り事務所には立ち入ることができません。ただ.....」

「ただ？」

常田さんが一瞬言葉に詰まり、迷ったが、父さんが常田さんの目をじっと見つめる。彼女は窓の方向に視線を向けて、遠くの空を見つめながら話を続けた。

「4階の事務所で正之君の向かいに座っている上司の遠山課長が、他の社員がいる中で大きな声で叱責していることを何度も見えています。たまに、その.....椅子を蹴ったりもしていました。それから、同じテーブルに集まって他の社員が談笑しているのに正之君だけが違う机に座ってうつむいて仕事をしていることもありました。そういうのが毎日でした。」

「そんなことが.....」

父さんが言葉に詰まる。

「私たちも社員さんたちにはちょっとした小さなミスでよく怒られています。もちろんミスをしたことが悪いのですが怒り方がなんというか.....陰湿で。社員の中でも正之君は違った雰囲気を持っていました。私たちにもきちんと挨拶してくれましたし、礼儀正しい子でした。パートの人たちは正之君をみんなで応援していましたが、立場上なかなか抗議することができませんでした。」

「そうですか」

「仙洞パートナーズの前任の責任者は年配でもあり、上司の遠山課長を注意していましたが、その人が辞めてからは、新任の責任者は若いこともあり親会社の人間には言えません。私は正之君を見かねて亡くなる数日前に内部告発をしようと思いましたができませんでした。申し訳ありませんでした」

常田さんが深々と頭を下げた。両手で三つ指をつき、深く頭を下げる様子に父さんが慌てて「やめてください、顔をあげてください」と声をかけた。

「会社からは、口止めのような連絡もありました。お父さん、第三者機関とか労働基準監督署とかに訴えるべきではないですか」

「.....ありがとうございます。パワハラを行っていた上司が遠山課長だということは、息子の残した書類を調べてなんとなく分かっていましたが、これで明らかになりました。明日本社に伺い、再度、原因究明を要求してきます。」

父さんは僕の写真を見つめながら、続けた。

「これまで正之が頑張ってこられたのは皆さんのおかげだと思います。ありがとうございました。とりあえず今は、会社の調査報告書待ちです。その内容によって、しかるべき措置はとろうと思っています。よく考えてみます。」

それから父さんは、会社から口止めのような連絡がメールなどで来ていれば保存して欲しい、勤務に復帰したら私が起こす行動を見守って欲しいと彼女に伝えた。常田さんは涙ながらに何度も何度もうなずき、帰っていった。

《六月十七日》

父さんは朝から緊張した面持ちだった。表情がいつもより強張っており、スーツを身にまとうがその指がかすかに震えていた。仙洞運輸本社を訪問する日だ。

会議室に通された父さんは、本社の人事部長と人事部マネージャーと顔を合わせた。

「原因究明について、どうなっておりますか？」

「当社の事業所の社員は、情緒不安定状態でまだ調査できておりません。出勤ができない社員もいる状況です。もう少しお時間をいただけませんか？」

「十四日に事業所に伺った際、そのことは聞いております。調査報告書の期日を六月三十日とさせていただくということでいかがでしょうか。まずは原因が究明できなければ、対応策を講じることもできないと思いますので。」

「分かりました」

しぶしぶといった様子で人事部長がうなずく。

続いて、会社から給与のこと、退職金、弔慰金について説明があった。父さんはただ黙って話を聞き、時折メモを取った。高層ビルから見える都心の景色がふと父さんの視線に入る。

「いい景色ですね。正之がこの景色をもう見るということがないということが、とても悲しいです.....ご対応、どうぞよろしくお願いいたします。」

父さんは頭を下げ、人事部長と人事部マネージャーは二人とも父さんよりもっと深く頭を下げた。

《六月二十日》

前日から実家の農作業をしていた父さんは朝早く自宅に戻った。実家から自宅まで車で約1時間半かかる。父さんはぼんやりと自宅のマンションを眺めていた。父さんは、母さんと結婚する少し前に購入したらしい。母さんは大雑把で明るい性格だった。一緒にいるといつも心穏やかに過ごすことができた。結婚して翌年には子供である僕が生まれ、父さんがいうには最も幸福な時期であったらしい。父さんはこの時期、東京で働いていたが、毎日急いで帰ってきてくれた。

父さんはしばらくマンションを見つめていたが、いつまでも明かりが灯ることのないそのマンションの一室を見て、ただ小さくうなだれながら、部屋に戻っていった。

夕方ごろになると、パートの春川さんの再訪があった。春川さんは少し話しぶりそうに、うつむいたまま言葉を絞り出した。

「18日、本社の調査がありました……」

「そうなんですか」父さんが身を乗り出して話を聞く。

「正之さんと付き合いがあった私たちパート一人一人にヒアリングがありました。口止めされていた人たちもいたようですが、皆知っている限りの全てを正直に話したと言っていました。もちろん私も」

「ありがとうございます。少し前に本社を訪問し調査の要求をしましたので、早速の調査だと思います。」

「そういえば、事業所の守衛の方も是非焼香に伺いたいといっていました。正之くんは守衛の人にもきちんと挨拶していて……亡くなったことを知りショックで数日出勤できなかったみたいで……」

「是非是非、きていただけるようお伝えください」

《六月三十日》

この日、父さんは朝早くから身支度を整えていた。スーツに着替えると、仙洞運輸の本社に向かった。今日は、お父さんが伝えた調査の期日で、会社から中間報告を受けることになっていた。

人事部長と人事部のマネージャーがソファに座るよう、父さんに促してくれる。

「わざわざお越しいただき申し訳ありません」

「いえ、お気遣いなく」

「中間報告ということですが――」

書類がテーブルに広げられる。父さんは中間報告書と記載された書類をじっくりと睨みつけるように、見つめていた。

中間報告書には、僕についてヒアリングした記録がまとめられていた。それから、僕の勤怠記録、タスク遂行シート・月間指導記録なども添えられている。

《中間報告書》（抜粋）

1. A氏

稲葉さんは、1年目は前任者と一緒に仕事をしていた。2年目は前任者の業務を引き継いで一人で仕事をできるようになったが、業務の理解が不十分と思われる点もあり、彼に任せるのは難しかった。

私は、稲葉さんに注意をした。本人の受け取り方にもよるが厳しいと感じることもあったかもしれない。入社してから年数も経ったので、最近では皆がいる前でも指導した。たまに呼び捨てにしていた。「お前」「ふざけんなよ」「何やってんだよ」とは言っていたと思う。話し声よりも大きい声だ。机を叩いたこともある。時間外勤務をせずに帰ったときには、「よくこの状態で帰れるよな」と言った。

業務のことを注意した。人格否定はしていないつもりだ。もちろん、手は出していない。

稲葉さんの体調は、ずいぶんと調子が悪いようだった。でも、ここのところは良くなってきたように見えた。

六月二日は、稲葉さんの仕事が終わらなかった。「今日はあがりな」と言って、17時30分頃に帰宅させた。

2. B氏

稲葉さんが注意されていたのは、彼のミスが原因だ。

大きな声で1日3回は注意されていた。机を蹴ったりもされていた。「お前」、「何やっているんだよ」、「頭おかしいんじゃないの」、「水飲んでいない場合じゃないだろう」と言われていることもあった。上司のAさんは基本的に言い方がきつい。Aさんの場合は、他の人にもだいたい同じ言い方だ。

稲葉さん本人は、言われても落ち込んでいる暇もない様子で、自分から「辛い」とは言わなかった。「頑張らなきゃ」という意識が強い感じだった。彼とは休憩時間は同じだったけど、彼は食事にはほとんど手をつけなかった。

事件の前日、六月二日は、彼の担当する業務でミスが起きた。その日はいつも以上に大きな声で指導されていた。「ばかやろう」ぐらい言われていたと思う。10分ぐらい指導が続いていた。

合計で20名以上の社員らにヒアリングした記録が続く…

ヒアリング対象者の個人名は伏せられていたが、面談で聞き取った内容をそのまま記載したものだという。父さんはそれらの文章をじっと見つめ、それから小さくうな垂れた。うめき声が唇から漏れる。しばらく言葉が出てこないまま、無言の時間が流れる。ぎゅっと握った書類にしわができた。

人事部長から中間報告について補足の説明があった。「お父様からは、6月末までに事実関係の調査をするようご要望がありました。現在、当社では、慎重に事実調査を進めている最中で、今日までに必要な調査を完了することができませんでした。お時間をいただき申し訳ありませんが、さらに追加調査をしたうえで、当社の総括を別途ご報告する予定です。」

「わかりました。息子が残した会社の書類が入社時から2年分あります。社員名簿もあり、人員構成なども把握しています。ヒアリング結果に照らせば、おおよその方が何を言ったのかは推測できます。「何があったのか」という部分は、きちんとした詳細な調査をお願いします。特に、遠山課長には思い当たることがあるはずです。」

人事部長と人事部のマネージャーが父さんに頭を下げた。父さんは深々と頭を下げ、「よろしくお願いします。」とぼそりとこぼした。

《七月三日》

父さんは時折、手を止めてはぼんやりとしながら、書類整理をしていた。インターホンが鳴ったのは、午前11時ごろのことだった。

仙洞運輸パート従業員の香田さんと篠田さんだった。父さんが頭を下げると、二人は顔を見合わせてそれから小さくうなずいた。

「先日、私もヒアリングを受けました。直接見聞きしたことを話すようにとのことでした。ただ、私はパートで事務所内には入れないので具体的なお話ができていません」

香田さんに続いて、篠田さんが口を開く。

「僕は、彼とは時々話をする仲でして……帰るときも明日休む場合は「明日休みます」、いつもは「お先に」と言って帰っていきます。六月二日の日は「お先に」と言って帰っていった……翌三日に出勤したときに、車がなかったので「あれ」と思いました。」

「息子のことを気にかけてくださっていたのですね。正之が会社から持ち帰った書類を調査していますが、2020年の1月に上司で新入社員指導担当である方が異動になっています。前任者の時代は丁寧な指導記録がありました。けれども、次の指導担当に代わってから記録のトーンが明らかに変化しているように見えました。前任者がいなくなってから厳しい指導が始まったという話も聞きました。」

「私たちも詳しくは知らないのですが……ただ怒鳴るような声は増えていたように思います。」

「仙洞パートナーズの課長の鈴木さんがいたころは、鈴木さんが遠山さんに、『そこまで言わなくてもいいじゃないか』と言っていたようです。」

「鈴木さんですか。あの人、60歳を超えていて……心臓が悪くて辞めたいとよく言っていましたね……少し前に急死されました。正之くんのことを応援していたと思います。『いろいろあるが頑張れよ』と肩をたたいたり……もしかしたら、鈴木さんがいればこんなことにはならなかったかもしれないですね……」

「ええ、そうかもしれません……残念です。」

「厳しい言葉や椅子を蹴っ飛ばすのは遠山課長です。ただ、秋原さんも正之くんの仕事状況や指導を受けている状況をよく把握していたように思います。直接厳しい言葉をいうのは遠山課長ですけど、秋原さんもそうさせるような雰囲気があったというか。パワハラはかなりしんどいと思います。正之くんが業務を引き継ぎしたのに何も分かってないと責められていました。でも、それは遠山課長らがしっかり教えていないからだとは思っていました。」

「正之くんの死にショックを受けたパートの子が、しばらく休んでいます。今も……」

「皆さんに心労をおかけして、申し訳ないです……いろいろお聞かせ下さいましてありがとうございます。」

父さんが頭を下げると、二人もまた深く頭を下げた。青く晴れた空に似合わず、どんよりとした曇りのような雰囲気がその場に漂っていた。

《七月七日》

夜、自宅に電話があった。僕の前任の指導担当の先輩からだった。父さんは、電話越しにメモを取りながら、彼の話聞いた。

「僕は正之くんの2年先輩で、彼が入社した2019年からおおよそ1年間指導担当でした。もともとおられた秋原さんのジメジメした指導も、後から来られた遠山課長の強い口調も、僕自身は気にしないようにしていました。でも、彼らの態度に対する感情が、私の表情にも出てしまったことがあって、そのせいで私は

異動を命じられました。正之くんは真面目だから、二人の言葉をまともに受けてしまったんだと思います。」

「そうですか……生前は息子に丁寧に教えてくださり、ありがとうございます。」

「その…正之くんのこと、何もできずに申し訳ありません。」無意識に出た彼の謝罪の言葉が、父さんの心にじんわりと滲む。

「いいえ。お話、ありがとうございます。息子の分も、これからお仕事頑張ってください。」

電話を切った後、父さんはしばらくぼうっとしていたが、またすぐに書類の整理を始めた。

《七月十六日》

父さんは朝から書類の整理を続けており、手を止めた頃、インターホンが鳴った。ちょうど夜 19 時を回っていた。

パートの香田さんと仙洞パートナーズの加藤さんだった。

父さんは、書類を端の方に寄せ、ダイニングテーブルに座るよう二人を促す。玉露の匂いがふわりとあたりに香った。

加藤さんのことは父さんにも一度話をしたことがある。確か、加藤さんから野菜をもらい、それを父さんと二人で調理して食べた。真っ赤なトマトに、きゅうり、パプリカ、それから。

「あなたが加藤さんでしたか。色々とお世話になりました。」

加藤さんが話し始めた。「正之君には、自分の健康状態のことをお父さんにも話をしたほうがいいよと言いました。正之君、食事は半分ぐらいしか食べないんです。食べられないですよ、と言っていました。ずいぶん痩せていました。真面目過ぎたのだと思います。」

「あれは完全にいじめでしたから。あんなような状態になっているのに、厳しい言葉を繰り返すのは許せない」と調査のときには伝えていきます。」

父さんはメモを取りながら、ぎゅっとまぶたを閉じた。

「……調査が進む段階で、質問書を出しますが、会社側がどこまで認めるかですね。最終的に会社側が労災を申請してくれることを望んでいます。」

「あの人は……遠山課長は、病気じゃないかと私も時々思います。このままではいけないと。調査のときに、パートナーズの皆で相談し、自分たちが見聞きしたことをありのまま話すことに決めたんです。正之くんの死を無駄にしないためにも。」

「もともと秋原さんがいて、新任の方を厳しく指導して、それに遠山課長が加わってしまった気がします。」

「正之は、精神科医の診察を 8 回は受けていて、仕事がうまくいかないということを相談しています。五月二十九日が最後の診察でしたが、その前と変化はありませんでした。前日の六月二日に会社で何かあったはずだと思っています。調査もそこを重点的にお願いしています。実際、パートナーズの方の証言で厳しい指導があったようですし。自分は気づくことができませんでしたが、正之がどんなことを最後に考えていたのか、どんな時間を生きていたのか……私はそれを知りたいんです。」

「秋原さんと遠山課長と一緒にいる職場環境に問題があったと感じます。今でも社員の配置に変化がないのですが、会社はどういう考えなのか、疑問です。」

「会社側は、調査を慎重にやっているようです。私が労働基準監督署等に相談すれば調査は進むのかもしれませんが、情報は会社側で持っていますので隠されてしまうおそれがあります。進展はゆっくりでも、現在のところ誠実な調査が行われていますので信頼して待っている状況です。今後、会社は最終の報告書を取りまとめる予定だと聞いています。」

話を終えた頃にはもう 21 時をとくに過ぎていた。3 人は随分と話し込んでしまったようだ。父さんは僕の遺影をそっと撫でて、それから遅すぎる夕食の準備をはじめた。

《七月二十日》追加報告

昼から、仙洞運輸の本社で調査の追加報告があった。前回の中間報告と同様の顔ぶれが集まり、父さんは促され、ソファに腰を下ろした。前回よりも少し重たく、呼吸が苦しくなるような空気だった。

「それでは前回の中間報告の後、追加で調査した内容を報告します。これでヒアリングは一旦終了とすることを予定しています。」

そう言いながら、書類が広げられた。その場にいた全員の視線がその書類に向く。空気がねっとりとしている。父さんはハンカチで汗をぬぐいながら、それでも視線を離さなかった。追加の調査はパワハラに関係すると思われる 3 名の職員を対象に行われた。

《追加報告（抜粋）》

1. A 氏

感じ方は本人次第だが、私が彼を怒鳴っていたことは事実だ。いつ頃から言っていたかは定かではない。2年目の春先までは様子を見ていた。それほど強くは言っていないはずだ。その頃は本人から病気のことも聞いていなかった。

体調が悪いと聞き、今年の初め頃からは現場作業をさせることを決めた。単純作業をさせた。例えば、間違いないかのダブルチェックなど。稲葉さんの反応は、「分かりました。」という感じ。

今春、本人から戻りたいという話があり、事務所作業に戻ってからは再度しっかり指導していた。毎日のように指導した。職場の人間が多くいるところで注意をした。他のメンバーにもよく聞こえていたと思う。

「ふざけるな」「お前」「何やっているんだ」「よくこの状態で帰れるよな」「頭おかしくなったんじゃないの」とか、これに近い意味の言葉を言っていた。汚い言葉だったかもしれない。大きい声も出していた。はじめのうちは丁寧に説明していた。彼が出来ないと分かっているにもかかわらず、根気よく何度も指導した。何度指導してもうまく伝わらないことにイライラして、さらに厳しく指導することがあった。伝え方を間違っていたと思う。自分の未熟さだ。汚い言葉に関しては、反省している。私が怒鳴ると、毎回ではないけど、「分かったふり」をするような素振りが見えて、さらに苛立ってしまった。「分かりました。」と素直に聞いてくれるが、結果が伴わない。頻度は少ないと思うが、高圧的な言葉で言ったことはある。習熟度を確認して指導していたつもりだけど、すべて自分の判断で、強い指導を続けた。自分の責任であると思う。

稲葉さんは、落ち込んだ様子は会話の中ではあまり分からなかった。最初は雑談もしていた。体調が悪くなってからは、集中力がなくなっている印象だった。自分のことはあまり話さないタイプだと思う。

2. B氏

自分の机は稲葉さんの机の隣だ。けれども、業務が忙しく、稲葉さんに対する配慮が欠けていた。稲葉さんは独り立ち後、戸惑っていた印象がある。前任者からの引継ぎが不十分だったと思う。彼の仕事が終わっていないとき、以前は、「手伝おうか？」と聞いていたこともある。でも、Aさんから、「本人にやらせないと、本人のためにならない」と言われていた。そのうち、「手伝おうか？」と声をかけるのをやめてしまって、本人にやらせていた。通常1時間かからない仕事が、1日かけても終わらないときなどは怒鳴られていた。

今思うと稲葉さんは病気だったと思う。私自身は、稲葉さんのこと、軽度な病気だと聞いていた。

自分自身の言い方が本人にとって厳しいかは分からない。自分はそんなに厳しい印象はないと思っているが、言葉の選択は良くなかったのかもしれない。自分の時代はこういうことが当たり前だった。でも今は時代が違う。

Aさんが稲葉さんを注意するのは毎日だったと思う。マンツーマンで指導していた。常に指導されているわけではないけど、各業務で問題が発生した都度、指導が入る。

Aさんの言葉づかいに関しては、Aさんが上司として着任した当時、別の女性職員から泣いて電話がかかってきて、「言動がきつく耐えられない。」と言っていた。私は、Aさんよりも上の上司に相談したことがある。Aさんよりも上の上司からAさんに警告があったようで、その後、しばらくは多少マシになった。上司のAさんはイントネーションがきつい。また、ロジカルに話をするタイプで、理屈で全て説明しようとする。Aさんとしては、理詰めで説明をしているつもりだったのではないかな。Aさんの場合、他の後輩職員にも同じような指導をしている。きつい言葉は、他の社員に対しても同じだ。

Aさんがいない時に、稲葉さんの様子がどうしても気になって大丈夫か稲葉さんに聞いた。稲葉さんは、「大丈夫。時間がないのに教えてもらっている。ありがたい」と言っていた。私はそれを聞いて問題ないと思っていた。

3. C氏

自分は、Aさんが稲葉さんに怒鳴りつけている状況を、直接は見たことがない。Aさんの問題について話を聞いた時は都度Aさんに注意をしていた。過去にも女性職員からAさんの言い方がきつく参っていると相談を受けたことがある。でも、自分は報告を受けたことがある程度で直接見聞きしていないから詳しくは分からない。

最近、Aさんらの担当する業務は、業務上の支障がなく稼働していたためAさんに任せていた。別の職場の仕事量が増えて、自分はそちらに行くことが多くなった。

Bさんに関しては、メンタル面が不安定な印象があるが、特段の問題は感じていない。

何か問題があったならば上司である自分に都度報告があると思っていた。自分から率先して稲葉さんのことを気にかけることはなかった。こういうことがあって、今は、所長として所内の雰囲気を変える必要があると感じるようになった。

「なるほどわかりました。」

父さんはすぐにA氏が遠山課長、B氏が秋原さん、C氏が進藤所長だと分かったようだった。アルファベットの上に、名前をシャープペンシルで記載する。

「今年の1月に実施された、息子のストレスチェックの診断書があります。高ストレス状態とのことです。この個人に対して通知された診断書は、会社ではどのように扱われるのですか？」

「ストレスチェックは、法令に則り実施されたものです。ストレスの高い状態の方には産業医の面談を提案します。」

「正之は、この結果をみて産業医ではなく、精神科医の診断を受けたのですね。進藤所長には精神科医の診断結果は伝わっていないわけですね？」

「そのように思います。」淡々とした言葉だった。

「前回の中間報告を読むと、前任者がいなくなった後に厳しい指導が始まったとありました。前任者である正之の指導担当が異動をさせられています。これは憶測でしかありませんが、前任者の方もまた厳しい指導を受けていたので進藤所長が異動をさせたのだと推察しています。そして、その厳しい指導のターゲットが正之に移っていったのだと私はそのように考えています。所長はそのようなパワハラ行為が恒常的に行われていたことを知っていたのではないですか？けれども、事業所内のパワハラを本社に報告せず、パワハラを防止する措置もとらずにいたのではないですか？既に前任者の方にヒアリングしたかどうかは知りませんが、経緯は彼にも聞けば分かることかと思います。」

父さんは、父さんの感じた疑問点を伝えた。前任者のこと、仙洞運輸の内部通報制度の問題点、遠山課長のパワハラ行為が普段から僕以外に対しても行われていたこと、他の職員がいる前での注意の問題点、彼の異常性など。人事部長は父さんの言葉に対して、時折頷き、あるいはメモを取りながら話を聞いていた。

「現時点で気になった点を口頭でお伝えしましたが、帰り次第、書類にまとめて提出させていただきます。先ほど、「ヒアリングは一旦終了」というお話がありました。でも、今回の報告で十分なのか、改めて検討させてもらいます。息子は、精神科医の診察でも、遺書でも、自分の仕事のできないこと、ミスが多いことなどをあげて、会社の悪口はひと言も言っていません。会社に多大な迷惑をかける、重くて苦しい.....自殺するにあたってどうしてこういう気持ちになったのか自分ではよく分からない、と書いてあります。自分のおかれている状況を客観的に把握することができない状態だったのでしょうか。周りの人が、パワハラを注意していれば状況は違ったかもしれません。パワハラを繰り返す社員はどこにでもいて、彼らは注意しても直そうとはしません。遠山課長のパワハラに関しては、その上司である進藤所長が常に注意しなければならなかったと思います。」

しばらく無言の空気が流れた。

「失礼いたしました。少し私ばかり話しすぎました。今日は、ざっくばらんに私の思いを話しました。これは、私の口を出すことではないのかもしれませんが、遠山課長が引き続き事業所にいるのであれば、遠山課長は指導者として問題があるので、その下にいる新入社員については配置換えをするのが望ましいと思います。正之と同じ苦しみを強いられる社員を出さないように。これ以上、被害者を出さないためにも。職場のパワハラの再発を防止して、正之と同じような被害に遭う若者を生まないこと。それが、私が何よりも会社にお願ひしたいことです。」

「ありがとうございます。本日のお父様のお話の中には、私どもが把握していない内容や気づけなかったご指摘が含まれていました。お父様が気づいた点は質問書の中に記載していただき、私どもの見解を含め最終報告の中に反映したいと思います。また.....前回もお願ひしましたが、医師の診断書と遺書とをお見せいただければと思います。」

「本日の報告書を見て判断したいと思います。」

父さんは帰ってすぐ、今日の追加報告のやり取りを記録にまとめて、会社の追加報告書に対する質問書を作りはじめた。夜は長く、朝はまだずっと遠い。

《七月三十一日》

今日も、会社の報告書に対する質問書を作成していた父さんは、昼前に家を出たかと思うと、あおばメンタルクリニックの青葉先生の元に向かった。

「お久しぶりです、お疲れではないですか？」

青葉先生は柔らかに微笑みながら、父さんにハーブティーを出してくれた。

「ええ、疲れてはいますが、立ち止まっているわけにもいきませんので。」

「そうですか。」

父さんは会社の調査報告について話をすると、職場でパワハラの事実があったことを説明した。

「今後、パワハラによる自殺が労働災害であるとして、労災保険給付の申請をすることになると思います。労災の調査の過程では、精神科医の先生の見解がポイントとなります。労働基準監督署から先生に問い合わせがあった場合、ご協力をお願いできませんでしょうか？」

「ええ、もちろんですよ。」
父さんはひどくホッとした顔で、ようやく勧められたハーブティーに口をつけた。

《八月十一日》
八月になっていた。
父さんは、会社の調査報告書に対する質問書を完成させて、郵送した。
書類の最初には仙洞運輸の「企業ポリシー」を記載した。
仙洞運輸のポリシーには、人格を尊重し、このポリシーに反する事態があった場合は、経営者の責任で事実関係を調査し、原因究明と再発防止を行うといった内容が定められていた。
父さんは、質問書に、仙洞運輸には「企業ポリシー」の精神をもって回答して欲しいと書いた。

【第4章】

《九月二十四日》 仙洞運輸が労働災害を申請する話
お彼岸の日、夕方になると、仙洞運輸の社長、常務、人事部長がお彼岸の焼香のために自宅を訪問した。ひととおり焼香を終えると、僕の仏壇の前で三人が父さんを見て、仙洞運輸の社長が口を開いた。
「今回の件、社内調査の結果をふまえ、労働基準監督署に労働災害の申請を行いたいと思っています。」
父さんは驚いたようだが、すぐに表情を硬くし頭を下げた。
「労働基準監督署が調査に入りますので、関係者の人事異動は控えています。ご了承願います。それから、お父様からいただいた質問書の回答についてはもう少しお時間を頂けますでしょうか。当社の企業ポリシーに則り誠実に対応します。」
「承知しました。労働災害についての労働基準監督書の調査に際しては、真実が明らかになるように誠実な対応をお願いします。個人名を隠したり、不都合な事実を隠したりすることなく、必要な情報はすべて開示して、できる限り協力してください。労働基準監督署の調査で死亡の原因を明らかにしてもらうことを望みます。」
「かしこまりました。」
父さんが仙洞パートナーズの皆さんからも協力を得て、地道に行ってきた事実関係の調査が、仙洞運輸の社長を動かした。僕の死がパワハラに起因するのかどうかの事実究明に向けて、ついに山が動いた瞬間だった。

《十一月十九日》 仙洞運輸の謝罪
紅葉があたり一面を絨毯のように敷き詰められ、秋が終わろうとしている。この日、ようやく仙洞運輸本社にて、父さんの質問書に対する回答が行われることになった。
父さんが本社に訪れると、いつもよりも多くの人間がその場で父さんを待っていた。仙洞運輸の社長、取締役、人事部からの四名だった。前回と比べると格段と空気が固く、誰もが緊張した面持ちだった。
「先日もお話ししたとおり、当社においてパワハラの実事があったことが確認されました。この結果を踏まえ、労働災害の申請を行うとともに原因究明、再発防止に向けた取り組みを実施していきます。この度は、当社の社員のご子息に対する数々の問題行動があったこと、パワハラがあったこと、大変申し訳ございませんでした。」
社長が深々と頭を下げた。
父さんはしばらく茫然としていたが、はっとすると深く頭を下げる。ようやく、僕の気持ちが報われたような気がしたのかもしれない。
必要書類が整い次第、労働基準監督署に申請を行うことについて説明があった。
「死亡診断書、戸籍謄本、住民票などの提出も後日お願いいただけると幸いです。」
「はい、もちろんです。労災認定の有無にかかわらず、今後も加害者の責任の追及、会社側の管理責任の追及は行っていただければと思います。」
「もちろん、そのつもりです。」
「こちらが頂いていた質問書に対する回答書です。ゆっくりご覧いただければと思います。」
分厚い書類が父さんの前に出された。父さんはまた頭を下げると、回答書を手に取った。
回答を抜粋すると、以下のような内容だった。

《弊社の調査結果（抜粋）》

1. 正之さんについて

2019 年、入社 1 年目は他の新入社員と同様に指導計画を立て、2 年先輩の職員が指導員となり、先輩社員と同じ業務を担当して業務の習得に努めていました。

2020 年 1 月に、その先輩職員が配置転換となり、正之さんと他の事務所の職員が同業務を引き継ぎました。当時、正之さんの担当していた業務の習得状況については十分なものだったとは言えず、当初の指導計画の目標を達成することができていませんでした。

正之さんの体調不良については、2021 年 1 月の通院後に報告を受け、職員間で共有しておりました。身体への負担が少ない現場作業への配置転換を提案し実施しました。

2. 遠山の業務上の言動について

課長の遠山の業務上の言動について、正之さんに繰り返し指導する中で感情的になり、「怒鳴る」、「汚い言葉を使う」、「汚い言葉で離れている人にも聞こえるぐらい大きな声を出す」、指導の際に「机を叩く」「音を立てる」ことを本人より確認いたしました。会社としてはそのような言動は、業務上必要性和相当性はないものと認識しております。

話しぶりは、本人特有のイントネーションや口調の速さ、せっかちな性格から、若手職員によっては近づき難い印象を受けているものもありましたので、所長の進藤から指導しておりました。しかしながら、進藤は具体的な事象を見聞きすることはなく、遠山のパワーハラスメントに対する認識はなかった、と進藤本人は話しています。

3. 今後の対応

正之さんがお亡くなりになったことについて、今後は、労働災害申請を行い、第三者による法的評価とこれまで実施した弊社調査結果をもとに原因究明を行います。二度と同じことが起きないように再発防止に向けた取り組みを実施してまいります。

《質問書に対する回答（抜粋）》

I. 書類に関しての質問に対する回答（略）

1. 遠山の面談記録について

(1) 課長とは、貴社においてどのような職位にありますか。

(回答)

課長は所属する部署の担当業務の統括責任者です。業務分掌については、営業所経営方針、営業所予算案の作成、部下の特性・成長目標を把握したうえで、担当する組織の教育方針・体制を考慮して部下ごとの育成計画を立て、それに即して、メンバーの能力を伸ばさせていくなどが挙げられます。

(2) 次の遠山氏の言動は、業務上の必要性和相当性は確認しましたか。業務上の必要性和相当性について、貴社の認識を教えてください。

「怒鳴る」、「ふざけんな」「お前」「何やっているんだ」「頭おかしくなったんじゃないの」「よくこの状態で帰れるよな」という汚い言葉を用いる、「離れていても聞こえるぐらい大きい声」、「机を叩く」、「音を立てる」

(回答)

遠山は、はじめのうちは丁寧に説明をしていたが、繰り返し指導する中で段階的に、なぜ伝わらないのかと遠山自身が感情的になり、正之さんに対して大声で接していたことを確認しました。

業務上において必要性和相当性はないものと会社は認識しております。

(3) 「事務所作業に戻ってからは再度しっかり毎日指導していた」との発言があります。「毎日のように」の頻度とそれぞれの指導の内容、態様について、具体的に教えてください。

その間、進藤所長による注意はなかったのでしょうか。

(回答)

感情的な指導は週 2～3 回、1 回あたり 10 分程度と遠山は記憶しています。

進藤は、相手への伝え方を注意するように四半期ごとの面談時適時指導を行っていました。しかしながら、進藤は遠山の感情的な指導については認識してはならず、具体的な事象を見聞きすることはありませんでした。

人事部は、2020 年 12 月に職員との面談を実施していますが、職場環境や健康面での質問においても問題がないということもあり、遠山の感情的な指導について会社は認識していませんでした。

2. 秋原の面談記録について

(1) 秋原氏の職位、担当する業務を具体的に教えてください。また、秋原氏と遠山氏との職務上の人間関係を教えてください。

(回答)

秋原は2003年に入社し、現在の職位はチーフとなります。遠山は弊社グループ会社より2016年に異動となりました。遠山の職位は管理職であり、一般職の秋原より上位の職位となります。

(2) 「Aさんが着任した当時女性職員から泣いて電話がかかってきて、Aさんの言動がきつく耐えられないと言っていた。何度もあったため所長に相談した。その後、所長から警告があったようだ」とあります。具体的に所長からはどのような業務上の警告があったのでしょうか。教えてください。

(回答)

進藤からは、遠山にコミュニケーションの重要性を話しており、個別面談等でも指導を行っておりました。進藤が「泣いた女性職員」に状況を聞いたところ、着任早々論理的に説明を受け、言い返せなかったとのことでした。

秋原は、遠山の汚い言葉については業務上必要性和相当性はなかったとの認識を話しています。

3. 進藤の面談記録について

(1) 進藤氏の職責を教えてください。

(回答)

営業所の統括責任者として、職場の労務管理の責任者であり、営業所内の人事配置や人事考課などの職務権限を有しております。営業所におけるコンプライアンスの責任者でもあります。

(2) 「怒鳴りつけていることは見たことない」とありますが、従業員の面談記録によれば、怒鳴りつけていたことは事実です。遠山氏は、怒鳴りつけることは進藤所長の前では避けていたと考えてよろしいでしょうか。

(回答)

遠山本人は、進藤の前で怒鳴ることについて意図的に避けていたという認識はありません。

(3) 遠山氏の「きつく聞こえる」言動について、業務上の必要性和相当性については、進藤所長は具体的にどのように考えていたのでしょうか。

(回答)

遠山は、説明する内容自体は指導の範囲との認識で、遠山の話しぶりは若手職員にとって、本人特有のイントネーションや口調の速さ、せっかちな性格から、「きつく聞こえる」と認識をしておりました。しかしながら、進藤は遠山の具体的な事象を見聞きすることはなかったため、業務上の必要性和相当性については検証しておらず、パワーハラスメントの認識はありませんでした。

(4) 「本人から病気だということは直接聞いていない。体調が悪いと知り、年始から現場作業にすることを決めた。その後、本人の希望で事務所作業に戻させた。」とあります。進藤所長は、承認したとの理解で宜しいでしょうか。

(回答)

進藤は、正之さんから体調不良の話を聞き、休暇や会社の休職制度の提案を行っていましたが、正之さん本人からの会社に来たいとの要望から、身体的な負担の少ない現場作業に配置換えすることを承認しました。事務所作業に戻る際は、正之さんの戻りたい気持ちと体調面の状況を本人に確認したうえで進藤は承認をしています。

4. 仙洞パートナーズの面談記録について

(1) 精神科医に通院する以前の2020年12月までの高圧的な言動についての記録を列記します。

①「ふざけんな、何やっているんだ。」と言っていた。稲葉さんは入社1年経過後から痩せて元気がなくなっていき、大丈夫かなと思った。

②昨年は週に1～2回事務所に入るたびに、毎回、怒鳴るような声を見聞きしていた。「馬鹿野郎、お前な」「なんでなんだ」「どうなってんだよ」「なにやっているんだよ」「ふざけんなよ」「ふざけんじゃねえ」という声が聞こえた。人を指導するような言動ではなかった。30分～1時間は続いた。机を叩く、机の脚の部分を蹴る、ロッカーを蹴るようなこともあった。

③稲葉さんが上司に呼び出され指導されている姿を何度も見た。ほぼ毎日言われている姿を見た。ミーティング時に「お前でなくてよい」と言われていた。遅れてきたときには「走れ」「ちんたら歩いているんじゃないよ」と言われていた。そのようなことを他の人が言われているところは見たことがない。

④直接パワハラの言動を見たのは月に数回ぐらい。1年半くらい前から。ホワイトボードの前だった。大きな声で怒鳴る感じ。稲葉さんが上司といたとき、パニックを起こして挙動がおかしかった。他の人が指導を受けているときも、稲葉さんは上を向いて目をつぶって倒れそうになっていた。指導を受けている人のことを稲葉さんが自分自身と重ねている様子だった。

⑤前任者がいなくなってから、ほぼ毎日のようにいつも何か言われていた。「てめえ」と怒鳴られていた。事務所の外には聞こえない程度の声量。別な上司は「この間教えたじゃん」と同じことを言い続けていた（15分程度）。12月頃、理解できているのか質問された際に、稲葉さんが答えられず「頭おかしくなっちゃったじゃないの」と言われていた。

この上司は遠山氏、別な上司は秋原氏と理解して宜しいでしょうか。

正之は、上司2人による言動を原因として身体的かつ精神的な苦痛を生じ、2021年1月に精神科医に通院するに至ったと考えています。以上の事実について、貴社はその当時認識していたかどうか、教えてください。

（回答）

上司は遠山、別な上司は秋原になります。

進藤は遠山の具体的な事象を見聞きすることはなかったため、パワーハラスメントの認識はなく、会社への報告も行っておりません。会社としては、認識はありませんでした。

(2) 精神科医に通院中における2021年1月から自死する前日の6月2日までの高圧的な言動について列記します。

①6月2日がとてもむごかった。極端に大きな声ではないが普段の声より大きかった。ミスしたことに対して、上司が同じことを何回も「ダメだダメだ」と繰り返していた。30分以上続いたのではないかな。

②5月下旬は「よくこの状態で帰るな」と残業しないことを責められていた。人を責める感じで「その状態で帰るのかなあ」「私が残業すれば良いから」といった言い方をしていた。6月2日、稲葉さんが別の職員に話しかけようとしたら、上司から「〇〇さんの時間を割くことがどういうことか分かっているのか」と怒鳴られていた。

③稲葉さんに仕事上ミスがあったから色々指導を受けるのは仕方ないが、体調不良になってから、罵声を浴びせることは許せない。「お前」と荒げた声で言われていた。別の上司は「早出しても出来ないならしょうがないわね」と陰口を言っていた。

④6月1日か2日の朝礼ではずっとうつむいていた。特に様子が違うように思った。

この上司は遠山氏、別な上司は秋原氏と理解して宜しいでしょうか。

抑うつ状態で精神科医に通院している状況のなかで、自死の前日までパワハラが継続していたことになりま。これは、進藤所長が、正之本人の希望があったにせよパワハラ上司である遠山氏の元に復帰させたことに起因します。

以上の事実について、貴社はその当時認識していたかどうか、教えてください。

（回答）

上司は遠山、別な上司は秋原です。

進藤は、遠山のパワハラについて具体的な事象を見聞きすることはなかったため、パワーハラスメントの認識はなく、正之さん本人の希望があったので事務所業務への復帰を承認したとのことです。

II.私の知り得た情報および知見に関する質問、意見

1. 正之が前任者から仕事を引き継いだ時期の対応について

「遠山さんの厳しい指導は前任者がいなくなってから始まった」との発言があります。前任者も厳しい指導を受けていたのではないのでしょうか。貴社はそれらを認識していたかどうか教えてください。

（回答）

業務上必要性のない「怒鳴る」ことについては前任者より聞き取りを行い、遠山にそのような言動があった事実を確認いたしました。しかし、その当時は、パワーハラスメントの報告がないため、業務上必要性のない言動があったことは会社として認識をしておりました。

2. 職場における優越的な関係を背景とした言動について

遠山氏の言動は、労働施策の総合的な推進並びに労働者の雇用の安定及び職業生活の充実等に関する法律（昭和41年法律第132号。以下「法」という。）第30条の2第1項及び第2項に規定する事業主が職場における優越的な関係を背景とした言動に起因する問題に関して雇用管理上講ずべき措置等についての指針（以下「指針」という。2020年6月1日から適用）における、職場におけるパワーハラスメント（以下

「パワハラ」という。)の3要素の内、①優位的な関係を背景とした言動、②業務上必要かつ相当な範囲を超えた言動に該当するものと考えられます。貴社が、その当時、問題を把握していたか、問題意識を持っていた場合どのような改善措置をとったのか否か具体的に貴社の措置を教えてください。

(回答)

当時、会社は遠山の職場におけるパワーハラスメントの認識はなかったため、問題として把握することはなく具体的な措置はとっておりません。

3. 職場におけるパワーハラスメントの防止のために講ずべき措置について

遠山氏は課長という職位にあるにもかかわらず、1年以上にもわたりパワハラ行為を行ったのは、パワハラに対する理解が全くないためと考えられます。指針には事業主は責務として「職場におけるパワーハラスメントの防止のために講ずべき措置」が定められています。貴社において、そのような措置が取られていなかったとの理解で宜しいでしょうか。

(回答)

会社としては、一般的なハラスメント防止措置として、ハラスメント防止に関する事業主の方針や内部通報制度の通報窓口を社内イントラネットへ掲示していました。当時、会社は遠山の具体的な職場におけるパワーハラスメントの認識はありませんでした。

——仙洞運輸の説明は終わった。

父さんは、会社を出た後、空を見上げた。時間はすっかり夕方近くになっており、空はオレンジと紫が混ざったような色をしていた。父さんは、しばらく空を見つめていたが、小さくうなずいて帰路についた。

《十一月二十三日》

十一月十九日の仙洞運輸の回答書を受け取ってから数日が経過していた。

父さんは、自分の会社の仕事をこなしながら、仙洞運輸の回答書に対する意見書を作成し終えたようだ。パソコンを前に大きく伸びをしている。数ヶ月前よりもわずかに顔色がいいように感じられる。

「仙洞運輸のパワーハラスメントに対する認識の有無への意見」

仙洞運輸は「パワーハラスメントの認識はなかった」とありますが、認識しうる状況にあったにもかかわらず、それを怠った、あるいは注意を怠ったものと考えます。その背景となる具体的な内容は以下のとおりです。

(1) この職場では、過去に、仙洞運輸グループの従業員が、うつ病に起因して自殺未遂をしたことがありました。その時点で、原因の究明と再発防止対策を講ずるべきでした。それにもかかわらず、遠山氏の言動について問題点を把握できなかったことは、これを怠ったことを裏付けています。すなわち、職場での業務上必要性和相当性のない行為について、これを制止する努力や注意を怠っていたと思います。

(2) 仙洞運輸本社の調査において、従業員は遠山氏の言動について総じて「指導のためだった」と発言しています。2020年6月の「パワーハラスメント防止措置」における労働者の責務においては「ハラスメント問題に関する関心と理解を深め、他の労働者に対する言動に注意を払うこと」とあります。指導をする場合でも、業務上の必要性和相当性のない言動はパワーハラスメントです。「指導のためであれば問題ない」という認識だとすれば、パワーハラスメントに関する従業員への周知徹底が不十分であったものと思っています。

(3) 内部通報制度は、法令に則り制定されているとのことですが、従業員にその活用について十分に説明されていませんでした。今回の件も、内部通報はなかったと聞いています。

(4) 正之の病状と精神科医に通院していることの報告を受けているのであれば、本人の了解を得て診断書の提出を求めるなど、従業員の心身の状態に配慮することが一般的な管理職、統括責任者の任務であると思います。その上で、本人に限らず周囲の従業員にも体調不良の原因について聞き取りを行うことが必要であったと思っています。進藤所長は、自分では遠山氏のパワーハラスメントを認識していなかったと言いますが、事務所の他の従業員にも聞き取りをするなど注意していれば容易に体調不良の原因を知り得たはずで、職場のパワーハラスメントを察知しようとする注意を怠ったのではないのでしょうか。

(5) 正之はストレスチェックにより高ストレス状態であるとの診断結果を受けています。正之はその診断結果をきっかけに自分で精神科医の診断を受けたのだと思います。ストレスチェックはその結果を分析して職場環境を改善し、うつ病等の疾病を未然に防止することが目的です。ストレスチェックの結果を無視して、職場環境の改善を図ることもなく、うつ病の発症と従業員の自死という最悪の事態を招いたのです。認識し

ていなかったのではなく、事業主の責務を怠ったことにより認識できなかったことが原因であると思っています。

文面は以上だった。

父さんは僕のスマートフォンの SNS を開く。

「弱い者達が夕暮れ さらに弱いものをたたく その音がひびきわたれば ブルースは加速していく（4 月 16 日）」

「気高い雀と惰眠をむさぼる鳩 格の違いは明白（5 月 30 日）」

1344 件。僕が SNS に投稿した回数だ。好きだった電車などの投稿もいくつかある。父さんは柔らかな笑顔でそれらの投稿をスワイプしていく。けれど、もう新しい投稿が上がることはない。すべての投稿をあらためて遡るとそのことに思いが至り、またため息をついた。

《十一月二十四日》

昼頃、父さんは瑞木総合法律事務所を訪れていた。仙洞運輸から受け取った回答書と父さんの意見書について、また今後どうしていくべきか、ということを経木先生と綿矢先生と話し合っているようだった。先生たちは静かに頷いた。

「仙洞運輸が労災申請を行うというのであれば、まずはその動向を見守るのがいいかもしれませんね。回答書に対する稲葉様の意見書については、労働基準監督署に資料として提出して、稲葉様の意見をお伝えする方法が考えられます。労働基準監督署の調査に備えて、これまでの調査資料を整理しておくのはいかがでしょうか。」

「準備しておきます。」

「刑事訴訟、民事訴訟については、そうですね.....労働基準監督署の労災に関する調査資料が、仮に訴訟となった場合の有益な証拠となると考えられます。そこで、まずは、労働基準監督署の調査の状況を注視しましょう。」

瑞木先生と綿矢先生が説明した。

《十一月二十五日》

午前中、父さんは仙洞運輸を訪れた。

労災申請の必要書類として、戸籍謄本、死亡診断書を提出した。

それから、自宅に残っていた僕の作業服などを返却した。わずかに汗の匂いが残るそれを父さんは少し名残惜しそうに手放した。

《十二月二十一日》

十二月に入り、木枯らしが吹いている。

その日、正式に労災申請書類が労働基準監督署に受理されたとの連絡があった。

《十二月二十七日》

年末が近い。一年が終わろうとしていた。季節は思ったよりも早い足取りで時間をたどり、僕の死んだ年を締めようとしている。父さんだけがそれに抗っているようにも思われた。

午前中、父さんは仙洞運輸にいた。労災申請のための事務的な手続の説明があった。淡々と言葉が紡がれる。

「死亡診断書、戸籍謄本、住民票、葬祭証明書、預金通帳写し、厚生年金等の加入状況届は当社からすでに提出しました。あとは、請求人であるお父さまから申立書と同意書の提出が必要となります。」

「わかりました。」

早速、夕方ごろ、労働基準監督署から電話があった。労働基準監督署は、父さんあてに、労災保険給付請求の調査に必要な「申立書」等の提出を依頼する書面を郵送したとのことだった。

《十二月二十八日》

翌日、労働基準監督署から郵便が届いた。

労働基準監督署の書類には、労災保険給付請求に関する調査のために提出する書類が書かれていた。申立書、同意書、遺書、診断書など。また、今後、調査の一環として聴取のために来署する必要があることも記載されていた。

父さんは書類の写しを準備しながら、万年筆で申立書に記入した。

翌日は帰省することになっていたため、荷物をまとめる。冬の冷たい風が父さんの頬を撫でた。

《令和四年一月一日》

年が明けた。父さんは帰省をしていた。幼少期を過ごした懐かしい匂いのする場所で空を見上げた。新年を迎えても、父さんの顔は暗いままで、まるでここだけ時間が止まっているようだ。

「お前のことを思うと、やるせない気持ちになるよ……」

僕に話しかけるように、父さんは朝日に向かって独り言をこぼす。

「昨年正月、正之はどのような気持ちで過ごしていたんだろうね。どうして……私は気付くことができなかったのだろう……」

苦しく気持ちの重い正月は、今も続く。父さんは僕のスマートフォンを開き、ちょうど去年の元旦早朝に近所の山頂からの初日の出の写真を見た。おばさんと一緒に初日の出を見に行ったときの写真だ。

真っ赤な初日の出は父さんの前にも見える。けれど、心が晴れることはない。

《一月十三日》

四日には自宅に帰った父さんは、それからしばらく仕事と労災保険給付請求の申立書の作成に追われていた。

その日、瑞木総合法律事務所を訪れていた。

「申立書の記載の内容について、ご確認をいただければと思います。」

「かしこまりました。確認のうえ、補強が必要な点は私どもが準備しますね。」

瑞木弁護士と綿矢弁護士は、本件が労災として認められるかどうかのポイントは、業務起因性にあることを説明した。僕の自殺が、職場のパワーハラスメントに起因するかどうか調査の対象となる。

父さんは、深々と頭を下げる。外に出ると、ひんやりとした冷たい風が吹いた。

《一月十七日》

ポストに向かう。しばらく入れるかどうかためらいながらも、赤い底に投げ込んだ。父さんは、申立書と同意書を労働基準監督署に郵送した。

申立書の設問に対して、答えた内容がぼんやりと頭の中をめぐる。

【問】精神的な症状はいつ頃から始まりましたか。

【答】令和2年7月から

【問】その症状を含めて、どのような症状がどの位続いたかについてできるだけ詳しく教えてください。また、病院に行くことになったきっかけについても教えてください。

【答】2020年夏ごろから倦怠感や貧血のようにふらっとする感覚が出現した。同年秋頃には、気分の落ち込み、中途覚醒、食欲低下などが出現した。休日は出かけても気分がのらず、趣味だった読書も文章が頭に入らないためしなくなり、ぼーっと過ごすようになった。仕事も、より時間がかかるようになり、些細なミスが増えた。また、職場で焦った際などに動悸がするようになった。2021年1月中旬に吐気がしたため会社を休み、業務量を減らしてもらった。これがきっかけとなり精神科の受診を希望し来院した。

【問】精神障害の発病前おおむね6か月の間に仕事の関係であなたが体験した出来事であって、精神障害の発病の直接の原因と考えている（ストレスとなった）出来事、また、それらの出来事が発生した時期をそれぞれ記入してください。

【答】仕事内容・仕事量の変化を生じさせる出来事があった（令和2年1月頃）

仕事のペース、活動の変化があった（令和2年6月頃）

配置転換があった（令和3年1月頃、令和3年3月頃）

上司等から、身体的攻撃、精神的攻撃等のパワーハラスメントを受けた（令和2年1月頃から令和3年6月2日まで）

理解してくれていた人の異動があった（令和2年1月頃）

上司が替わった（令和2年1月頃）

【問】（仕事以外について）その他気になることがありましたら記入してください。

【答】親である私との二人暮らしですが、6か月前から食欲がなく、精神科医に通院していたのは知っていました。入社3年目で仕事量と責任感からくるプレッシャーではないかと思っていました。私自身も会社で働き始めた頃の経験もあり、一般的な社会人として一度は通らなければならない道だと思っていました。度々大丈夫かと声を掛けていましたが、「父さん大丈夫だよ」との返事でした。親に心配をかけまいとの思いだったのでしょう。死の前日の6月2日の夜は、特に食欲がなく胃を押さえる仕草がありました。職場で尋常ではないパワハラ行為を受けていたとは、夢にも思いませんでした。

最後には、これまでの経緯と父さんが調査したパワハラの内容をまとめた書類を同封した。父さんは、できる限りの資料を集めた。父さんが独自に仙洞パートナーズの皆さんから聞いた話なども含めて、別紙でパワハラに関する具体的な事実と意見を記載した。
「.....ふう」父さんは小さく息を吐く。

《二月十八日》労働基準監督署の事情聴取

午後から、労働基準監督署にて事情聴取が行われた。同席したのは父さんと、労働基準監督官の二名。どこか厳かな空気を保つその場所で父さんはいつもよりも緊張した面持ちだった。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。稲葉さん。」

労働基準監督官が頬に笑みを灯し、父さんにソファに座るよう促す。固い椅子に腰掛けながら、父さんはハンカチで汗を拭いた。

「それでは、申立書、提出頂いた調査資料の内容、それ以外の事柄についてお聞きしたいと思います。」

「お世話になります。宜しく願いいたします。」

「調査資料をかなり詳細にいただいていますので、事前にある程度は理解しているつもりです。確認をしていきましょう。」

申立書と調査資料の確認が行われた後、父さんが説明した内容を記録した調書が作成された。

《調査概要》

令和3年6月3日午前11時、仙洞運輸事務所より父親稲葉清美に息子正之が出社していない旨の電話連絡あり。父親13時に帰宅、正之自室にて自死していることを発見。死亡推定時刻午前9時。

6月6日告別式終了後夕刻、パート従業員2名が稲葉宅訪問。職場でパワハラ行為があったことを聞く。

父親、仙洞運輸本社に調査を要求。社内調査実施、中間報告に対して父親質問書提出。

仙洞運輸の社長は、同年9月24日稲葉宅訪問、業務上の必要性と相当性の範囲を超えたパワハラ行為のあったことを認めて謝罪をした。そして、仙洞運輸の社長から、労災申請を行うことの話があった。

父親稲葉清美、正之は同居。高校3年間は他県の祖父母宅から他県の高校に通学。高校3年間は別居。以後、大学、就職以後は同居。母親は正之中学1年のとき病死。以後、明るく生きるよう努力をしていた。学級委員や部活の部長を担当しクラスのまとめ役。以後精神科医にかかるまで健康であった。

私生活や友人関係ではうつ病の原因となるようなことはない。本来は明るく生真面目な性格。

自死の前日6月2日の夕食は殆ど食べていない。食後自室に閉じこもった。当日過度な叱責を受けていたと会社の調査で数人が証言している。

1月にうつ病を発症し病状を上司に口頭で報告している。病状を知らながらもパワハラ行為はエスカレート。遠山課長、秋原チーフの行為は故意に匹敵するとも思わざるをえない。

父さんが話した内容に基づいて調書が作成された。父さんは、調書の記載内容を改めて確認し、署名、押印をした。

「資料はしっかりまとめられていますか、おひとりで取り纏められたのですか？」

「いえ。弁護士の先生方にお世話になっています。」

「なるほど。おかげでとてもスムーズでした。稲葉さん.....労災保険の請求の他に、訴訟はお考えですか？」

「労災関係の調査が終了した後、刑事、民事で考えています。」

「そうですか。労働基準監督署での調査資料は、かなり有力な証拠になりますので開示請求をする方法があります。今回の調書を含めてできる限り調査資料はお渡ししたいと考えています。」

「そうします。」

「今後、仙洞運輸に調査に入ります。頂いた調査資料をもとに、どの方に聴取をするか検討します。調査の対象についてご意見などはありますか？」

「私の意見は事情説明書に記載済みですが、前日の6月2日に何があったのかを明らかにしてください。それと、進藤所長と他のマネージャーは何故パワハラ行為を認識して対応できなかったのかを知りたいです。仙洞運輸の同僚社員は終日息子と同室で一番事情を知っているはずです。社内調査では、厳しい言動があったことは認めていますか、「指導の一環である」「指導のためだった」と証言をしている社員がいます。息子ほどではないにしても被害に遭っていた社員は他にいないかもしれません。パワハラ行為をしていた上司の言動をどこまで証言してくれるかが心配です。」

「社員から十分な証言を得られない場合でも、頂いた資料によるとパートナーズの従業員の詳細な証言記録がありますね。また、精神科医に、意見書の提出を要請中です。私見ですが、労災が認められる可能性はあると思います。」

「そうであればいいのですが。」

「調査終了後は、労働基準監督署の上位にある組織である労働局に調査資料を提出します。その後、精神科医が参加する審査委員会が開催され認定の可否が審査されます。労災認定されないこともあります。本件の申請書受理が昨年12月ですので認定の可否が出るのは早くても6月ごろでしょうか。」

「そうですか.....正之の死からちょうど一年が経つ頃になりますね。」

父さんは深く頷いた。

「私は、労災申請によって行われる調査、民事訴訟における審理、刑事事件の捜査などを経ることで加害者と管理者の責任を追及してハラスメント行為は犯罪であることを明確にしたいと考えています。それによって、ハラスメント行為で苦しんでいる若い人を一人でも救えるのであれば、息子正之が生きてきたことが意味のあることになるのではないかと思います。正之は戻ってきませんが、親としての責任を少しでも果たしたいと考えています。どうか宜しくお願い致します。」

頭が下げられる。労働基準監督署の監督官も父さんに合わせて、頭を下げた。

《三月一日》

春もう間近。入社が時期が近くなってくる。桜の花はすでにちらほらと咲き始めていた。

父さんは午前中に労働基準監督署に調査を求める事項の要望書を提出した。弁護士の瑞木先生と綿矢先生が取りまとめを手伝ってくれた。父さんは、遠山課長のパワハラ行為の具体的な内容と会社の安全配慮義務違反に関する具体的事実について調査を要望した。

《三月三日》

その日、父さんは朝早くから目を覚まし、布団の中でぼんやりと思考を巡らせているらしかった。

今日は母さんの命日だ。母さんが亡くなって、十四年もの年が過ぎた。平成二十一年にくも膜下出血で急死してから、僕は父さんと二人で生活をしてきた。そして、去年、僕も消えた…

朝早く、まだひんやりとした空気の中、窓を開けた。仏壇に買ってきた花をあげ、それから香をたく。お香のやわらかな、それでいて背筋の伸びるような香りが鼻を抜けていく。父さんは背中を少しだけ丸め、僕と母さんの写真を眺めていた。

「母さんも正之も亡くして、何を生きがいに、何を希望に私は生きればいいのか……」

ぼそりとこぼした言葉が静かな部屋で消えていく。

「遺書にも、父さん僕の方も生きてくださいとあったけれど.....父さんは、どう生きればいいのか.....わからない.....わからなくなってしまった。律子も正之も、健康上の兆候があったのに、私は何も気づいてやれず死なせてしまった。」

瞳が潤む。けれど、涙は頬を伝うことはなく、父さんはぐっと天井を見つめる。今は、ただ、労災が認定されるのを待ち、そして民事、刑事の両面で加害者と会社の責任を追及し、パワハラは犯罪であると強く訴えていくことしかできない。

《三月三十一日》

この日、父さんは長く勤めた会社の退職を決めた。

「これからは、正之のことだけを見ることができる。きっと、とても遅すぎたのだろうけれど.....」

【第5章】

《令和五年二月十四日》労災保険給付の決定

あれから春がきて、夏がきて、秋がきて、冬がきた。また一年が経過する。労働基準監督署の調査は思っていたよりもずっと長い時間を要した。

僕が亡くなってから、二度の年越しがあった。

その日、労働基準監督署から自宅に一通の通知書類が届いた。僕が死亡したことを労働災害と認めて、労災保険給付を決定したという通知書類だった。僕の死が職場のパワハラに起因すると認められたのだ。

父さんは、そのまま膝から崩れ落ちるようにして、しゃがみこみ、涙で頬を濡らした。

《二月二十一日》

父さんは、管轄の労働局あてに労災保険遺族補償給付の決定に関する書類のすべてについて、保有個人情報開示請求をした。労働基準監督署の調査の結果確認された僕に対するパワハラ行為を具体的に明らかにするために、労災の決定に関する書類、調査の記録、調査資料等を開示するように請求した。

以前労働基準監督署の監督官が情報開示を勧めてくれたことを、父さんは忘れてはいなかった。

《三月十三日》

労災の決定があったことを踏まえて、仙洞運輸から弔慰金等支払の案内があった。

お金で満たされるものなど、もうない。僕が帰ってくることもない。それをただただ理解するだけのお金だった…

《三月二十四日》

仙洞運輸の関係者による僕のお彼岸焼香が自宅で取り行われた。社長、取締役、人事部長が自宅を訪問した。これまで父さんが話し合いを続けた人物たちだった。

「大変お待たせいたしました。労災認定がありました。改めてお詫びとお悔やみを申し上げます。」

社長が深く頭を下げた。他の二名も頭を下げ、父さんも同じように頭を下げた。

「遠いところお運びを頂き、御礼を申し上げます。先般、弔慰金等の案内を頂きましたが、根拠となる御社の規程等を確認したいので、全文の写しを要請しています。弔慰金等については……私自身のなかでこれを受けとるに足る心情に至っていません。」

「ええ。規程等は整い次第、お手元に郵送いたします。」

ぼんやりと父さんが僕の写真に目を向けた。写真の中の僕はやけに眩しい笑顔で笑っている。

「私が今知りたいのは、なぜこのようなことになったかということです。労働基準監督署から労災の認定があり、職場でパワハラがあったことが確認されました。何故、1年以上もパワハラが行われ、これを防止できなかったのでしょうか……労災保険給付の申立てに際して私は意見書を提出しました。遠山さんがパワハラの行為者、秋原さんも遠山課長の指導のやり方に同調した人物です。ですが、この二人だけの問題ではなくて、労務管理者である進藤所長と他のマネージャーにも重大な責任があると私の意見を伝えました。御社の社内調査報告書では、所長はパワハラ行為の実態を認識していなかったとありました。1年以上にもわたり日常的に行われたパワハラ行為を認識できなかったということは、どう考えてもおかしいですね。上長が気づいてパワハラをやめさせていたなら、こんなことにはならなかったでしょう。何故、それが出来なかったのか、そこが知りたいのです。」

父さんは、息を吸い、言葉を続けた。

「息子が亡くなる前日、六月二日に何があったのかが問題です。遠山さん本人がいうには、「今日はあがりな」と声をかけて、「また明日」と言って帰ってもらったそうです。でも、他の方の証言では、かなりきつい言葉を投げかけていたということです。息子が何かを遠山さんに話をして、それに対して遠山さんが、それはどういうことか分かっているのか、そういう強い言葉を言ったと証言しています。そういうことを知りたいのです。」

社長が深く頷いた。

「パートナーズの方のお話によれば、もともとなんとなく異質な職場環境で、そこに遠山さんが来てしまったということです。そのような環境は秋原さんが作ったのか、あるいはそれ以前からあったのか、何故そのような環境を放置したのか。息子が亡くなった翌年の新年の仕事初めの挨拶で、進藤所長は、「昨年は最悪の年であった」と皆の前で話したそうですね。そういう言い方はないよねと、違和感を持ったとパートナーズの方が言っています。正之に対しても、従業員さんに対しても、あまりにも心情を汲み取っていない発言だと思います。従業員に対するそのような態度が、このような職場環境を作り出した原因ではないのですか。」

父さんは握りしめた拳をそのまま解くこともできずに三人を見つめた。

「——今、管轄の労働局あてに労働基準監督署の調査資料の全てを開示請求しています。進藤所長の他数名の方からも聴取をしたと監督官から聞いています。聴取を受けた方々は、事実を述べて反省をしているのでしょうか。情報が開示されるとしたら、四月下旬になると思います。弔慰金の受取りに応じるか否かはその内容にもよります。息子の遺書には、何故死にたいと思うようになったのかよく分からない、父さん、育ててくれてありがとう、僕の方も長生きしてください、とありました。私は、息子のためにも、ハラスメント行為で苦しんでいる若者を一人でも助けることが出来るような活動をしたいと思っています。それが、息子が私に与えた宿題だと思っています。弔慰金を受け取れるような心情になったときは、そのような活動の資金として活用したいと思っています。」

「お父様の心情、ご意見は重く受け取りました。当社では、再発防止に向けて、各事業所において、さらなる教育を続けているところです。頂いた意見に対して誠意を持ってお答えしたいと思っています。」

三人が頭をもう一度下げる。父さんは握りしめた拳を解かずじっとたたずんでいた…

《四月二十一日》

十八日、労働局長は、労災保険給付に関する保有個人情報について、その一部を開示する決定（部分開示）をした。父さんは、その通知を受け取って、いち早く、労働局から開示された資料を受け取った。従業員から聴取した記録は開示されなかった。黒く塗りつぶされている。父さんは、瑞木総合法律事務所にこれらの書類を郵送した。

《四月二十七日》

間もなく、瑞木弁護士から連絡があった。労働局の書類を受け取って、瑞木弁護士と綿矢弁護士が検討したという。労働局長の部分開示決定に対する不服申立てについて提案があった。労働局の保有する労災保険給付に関する書類の一部が開示であることについて、さらなる調査を行い、開示できる可能性について検討をするとのことだった。

《四月二十八日》

庭の花の手入れをしながら、父さんは太陽の日差しを眩しそうに見つめた。春は駆け足に過ぎていき、桜ももうとくに散ってしまった。紫陽花の葉が青々と実り始める。花をつけるのもきっともうすぐだろう。母さんと僕で見にいった紫陽花が――。

「おはようございます、稲葉さん」

水をあげている父さんに声をかけたのは、ちょうどマンションを巡回している交番のお巡りさんだった。いつも同じお巡りさんがこの辺りを巡回していて、僕も何度か顔を合わせたことがあった。

「おはようございます。」

父さんは少し考えて、僕の受けたパワハラについて、被害届の相談をした。お巡りさんは、途中から真剣な眼差しでメモを取っていた。

「では、こちらから連絡を入れておきます。後日、刑事課の警察官から連絡があるかと思います」

「わかりました、ありがとうございます。」

《五月八日》

朝方早く、警察署刑事課から連絡があった。

「私の息子が自殺し、労災の認定がされました。パワハラに関与した上司を対象に被害届を提出したいと思っているのですが.....相談にのっていただけないでしょうか？」

「ご愁傷さまでした。お話は分かりました。パワハラ、いわゆる言葉の暴力による刑事案件の取り扱いは、法律の解釈により稲葉様のお考えにお応えできない場合もあります。被害届の件ですが、可能であれば事前に弁護士の先生にもご相談なさるのはどうでしょうか。」

「そうですか。十日に弁護士の先生とお会いすることになっています。その時に、今のお話の内容をお伝えします。先生の了解が得られれば、先生からそちらへ連絡していただく形でも問題はありませんか？」

「それは構いません。」

《五月十日》

午前10時、約束どおりに瑞木総合法律事務所に父さんは向かった。

労働局の労災に関する資料のうち一部を開示とする決定について、厚生労働大臣あてに、審査請求をする方針について打合せをした。父さんは、弁護士に、警察署刑事課と話した内容も伝えた。

《五月十二日》

午後、瑞木弁護士から連絡が入っていた。

「警察署刑事課からお電話がありました。パワハラと死亡との間の因果関係の立証には、精神科医の供述がポイントになるようです。本件は、検察庁での取扱いになるという話がありました。稲葉様は、直接検察庁あてに被害届を出す方法もあります。また、厚生労働省に対する審査請求の結果、追加で開示される記録があれば、それも刑事事件の証拠になるかもしれません。」

そのような説明があった。

《五月十八日》

父さんは、厚生労働大臣あてに、労働局の労災保険給付に関する書類の一部を開示とした決定についての審査請求書を、厚生労働省大臣官房総務課情報公開文書室あてに提出した。

《六月三日》

午後より、僕の三回忌の法要が執り行われた。

家族一同と住職が集まった。父さんはぼんやりと視線を空に向ける。

《六月四日》

翌日の焼香にはパートナーズの従業員のみなさんらが来てくれた。

「三回忌、焼香頂きまして、ありがとうございます」

父さんがお茶を出しながら、頭を下げる。

「もう2年経ったのですね」

その場にいた全員が僕の写真を見つめる。

「労災の件は、その後、どうなりましたか？」

「労災であるという認定結果の通知を受けて、管轄の労働局長あてに、労働基準監督署の調査資料等すべての開示を請求しました。このうち一部の調査資料は開示されたのですが、肝心の聴取の記録は黒塗りで不開示でした。私は、一部不開示の決定に対する不服申立てのために審査請求を出しています。」

「監督署の調査の際、私も含めて数人が聴取を受けて、それぞれ見聞きしたことを伝えました。その間に辞めてしまった職員の方もいましたが。」

「私は別の部署に異動しました。遠山さんも転勤したようです。秋原さんはそのままなので、事務所の雰囲気は大きく変わってはいないようですが.....」

「少し前に、社長はパワハラ防止対応を徹底してやっていくと言っていましたよ。」

「民事については、弁護士の先生と一步一步進めていきたいと思います。刑事については警察署にアドバイスをいただいています。あと.....2年掛かるか5年掛かるか10年掛かるか.....それすらも分かりませんが、正之が私に与えた課題をあきらめずに、真実を追究していきたい考えです。」

「見守っていきますよ、私たちも。」

その場にいた全員が柔らかに微笑んだ。着実に前に進んでいる。

《六月五日》

日が落ちたその頃、仙洞運輸に勤める派遣社員が数名、自宅を訪問した。焼香のためだった。

「今日は、ありがとうございます。」

父さんがお茶を持っていくと、一人が深く頭を下げた。

「私は、正之さんと事務所で派遣社員として働いてきた者です。お父さまには謝らなければならないことがあります。」

「どういう.....ことですか.....」

「正之さんの元気がなくなったとき、「三年ぐらい我慢すれば異動ができるからと頑張りなさい」と私が言ったんです。それがこんなことになってしまって、本当に申し訳ありません。」

その人の拳が震えている。涙が衣服に染み込むのが分かった。

「頭をあげてください。きっと正之はあなたにもとても救われたのでしょう。」

「ありがとうございます.....正之くんは他の社員とは違っていました。派遣社員にもきちんと挨拶してくれ、帰りの際もご苦労様と声を掛けてくれました。今回、仕事量が減り私も人員整理の対象になりました。思っていたよりもずっと、気持ちはスッキリしています。保身もありなかなか勇気がなくて、ずっとお話できずにいました。」

「そうだったんですね」

「職場は秋原さんに精神的に支配されています。私も長く勤めていますが、彼女は私よりも五年ほど前から在籍しています。多分、徐々にそういう環境を作り上げてきたのだと思います。」

「秋原さんとはどういう方なんでしょうか？」

「彼女は五十代くらいで、仕事はできます。ある段階を過ぎて、仕事ができなかったり、自分の味方にならない人間に対しては攻撃をしたりするんです。以前秋原さんと口論になったことがあったんです。どうしても彼女の言葉が理解できず、所長の所に行ったら後ろに秋原さんが立っていて.....結局私は何もいえませんでした。ぞっとしました。」

指がかすかに震えていた。

「それから、ある女性従業員を秋原さんがいじめていると知った社員が、かなり強い口調で秋原さんに注意したことがあったんです。その社員の方は年下ですが能力があり、到底秋原さんは太刀打ちできません。彼女はただうつむいていたのですが、ただ.....彼女、後ずさりしながら下を向いてニヤニヤ笑っていたんです。」

思わず、その場にいた全員が息を飲んだ。彼女の奇妙さについて、理解が追いついていなかった。

「秋原さんと親しくしている方が、葬儀の後しばらくしてから、騒いでいたことを覚えています。お父さんから電話があったことを、秋原さんに報告していました。すぐに対策会議が開かれていましたよ。調査に対して口止めの話をしていたのかもしれない。」

「調査報告の際、社員の方は、「指導の一環である」とか「指導のためだ」とか同じような発言でした。」
「口止めは進藤所長の要請だと思います。所長は、人柄はいい方だと思うのですが、まもなく定年でしょうから、ある意味、保身というか、ことなかれ主義というか、そんな気持ちだったのでしょうか。それがこのようなことになってしまったのかもしれないね。」

「パートナーズの心臓疾患で亡くなった課長さん、彼は進藤所長と仲が良かったと聞いています。進藤所長は、良くない就業環境について彼から聞いていなかったのでしょうか。」

「パートナーズの課長は.....そうですね。何回も秋原さんに対して強い言葉で抗議していたことは知っています。その辺の経緯と進藤所長の対応について具体的なことは分かりません。ただ、彼がいれば正之君がこのようなことにはならなかった、とは思います。」

「遠山課長はおいくつぐらいの方ですか」

「秋原さんよりは若いかな.....40代でしょうか。システムには精通していたようですが、事業所の業務は初経験で、とても秋原さんには敵わなかったようです。転勤当初は秋原さんにやり込められていました。遠山さんは言葉はきついところがあります。」

「社内調査の報告によると、遠山さんは正之が亡くなる前日には、「ご苦労さんまた明日」と言って別れたと言っています。パートナーズの従業員の証言では、かなりきつい攻撃があったと書いてあるのですが.....どうもそのあたりの意見が食い違っているように思います。」

「事務所で正之君の椅子を蹴とばしてきつい言葉の攻撃があったとは聞いています。あの会社は、閉鎖的というか、揉め事を封じ込める雰囲気があるのです。多少風通しのよい雰囲気があればハラスメント行為を防止することに繋がると思うのですが。内部通報の制度はありますが、それが有効に機能しないのはそういう社風が影響しているのかもしれない。遠山さんは、今は本社の直轄で人との接触のない、一人で完結するような仕事をしているらしいです.....」

「事業所は今どのような状態ですか」

「進藤所長はそのままです。正之君がいた事務所スペースは閉鎖されました。反対した方もいたのですが会社側の強い指示でした。秋原さんは転勤の噂があったのですが、本人が拒否したのか、引き取ってもらったところがないのか、理由は定かではないですが、引き続き同じところに勤務していますね。それから今年は新人の配属がありました。今のところ無難に勤務している様子です。」

「そうですね.....新入社員の方にとっても働きやすい職場になって欲しいですね。」

父さんはほんの少しだけホッとしたように息を吐いた。それぞれが時計の針を確認し、客人たちがゆっくりと立ち上がる。客人が去ると、また自宅に静かな時間が訪れた。父さんはしばらく黙って、僕の写真を見つめていた。

《六月九日》

その日の焼香には、仙洞運輸社長と取締役が訪れていた。

「三回忌に際し、改めてお詫びを申し上げますとともに、息子さんのご冥福をお祈り申し上げます。」

二人が頭を下げた。少し時間をおいて、横に座っていた取締役から労働局の調査資料の開示の件について、質問があった。

父さんが答えた。

「私は、管轄の労働局あてに労働基準監督署の調査資料の全開示を求めたのですが、一部が開示でした。例えば、特定の個人が特定できる個人の氏名や聴取した内容を記載した調書の内容などが開示されませんでした。五月の連休明けに厚生労働大臣あてに審査請求を提出しています。結果が出るのは少なくとも3か月はかかるとのことでした。むしろ、実態については、監督署以上の調査が御社で可能なはずですが。今回労働局から開示された資料を見ても、遠山さんの前日の言動については確認できませんでした。私としては、真実を明らかにするために、一步一步できることを進めていく考えです。民事についても、弁護士から連絡が入るかと思います。」

「わかりました。」

《八月十四日》

厚生労働大臣から、「情報公開・個人情報保護審査会への諮問について」の通知が自宅に郵便で届いた。父さんが厚生労働大臣あてにした審査請求について、総務省の情報公開・個人情報保護審査会に諮問したという内容だ。

《八月二十九日》

情報公開・個人情報保護審査会事務局より、厚生労働大臣が同審査会に提出した理由説明書が届いた。

厚生労働大臣の理由説明書には、考え方として、「原処分は妥当であるから、審査請求は棄却すべきである。」とあった。管轄の労働局の一部開示（一部不開示）決定は妥当だから、父さんの審査請求は棄却すべき、という意味だ。その理由説明書が届いた。

また、父さんあてに、父さんから情報公開・個人情報保護審査会に対して意見書と資料を提出することができること、その意見書等を提出する場合の提出期限についての通知も同封されていた。

《九月八日》

午前中、瑞木総合法律事務所で今後の対応について相談した。

父さんは、情報公開・個人情報保護審査会から届いた書類について、瑞木弁護士と綿矢弁護士の説明を聞いた。そのうえで、同審査会に提出する父さんの意見書の作成を、瑞木弁護士と綿矢弁護士に依頼することとした。

《九月十五日》

早速、瑞木弁護士と綿矢弁護士が意見書を作成し、九月十五日には、総務省情報公開・個人情報保護審査会事務局あてに意見書を提出した。開示されなかった書類に関して、開示を求めるという意見の趣旨を伝え、個人情報保護法に基づいて不開示情報に該当しないことを、情報ごとに詳しく説明した。また、あわせて、聴取の被聴取者に対して不当な干渉を及ぼすことはしないという誓約書、労働基準監督署から受けた聴取の議事録を同封した。労働基準監督署の聴取の議事録を同封したのは、労働基準監督署の監督官が、父さんに、労働局の保有個人情報を開示するよう勧めたことを伝えるためだ。

《九月二十二日》

僕のお彼岸の焼香に仙洞運輸社長と取締役常務、人事部マネージャーが自宅を訪れていた。

夏が静かに終わり、だんだんと涼しい風の音色が響く。

焼香の後、社長が父さんをみて、頭を下げた。

「本日は、お父様にお願いしたいことがあります。息子さんに対してパワハラ行為をした遠山は、本社に転勤させました。秋原は東京方面の別の営業所に転勤させております。進藤は事業所の所長を継続させています。これらの社員に対し処分を考えているところです。その根拠となる資料としては、お父様にもお渡しした社内の調査資料はありますが、労働基準監督署の調査資料も第三者の公的な機関が調査した記録として確認したいと思っています。労働局から開示された労働基準監督署の資料について、その写しをご提供して頂くことは可能でしょうか？」

「以前もご説明したように、開示された資料は、会社の秘密に関する情報、個人情報に関する部分や聴取の記録などが黒く塗りつぶされています。労働基準監督署の調査資料のまとめの部分で良ければ写しをお渡しします。」

父さんは開示資料のうち、「精神障害の業務起因性判断のための調査復命書」と書かれた数ページの文書を渡した。

「今お渡しした資料は冒頭のまとめの部分です。こちらに本件が業務上の精神障害と認められたという結論と理由の記載があります。しかし、その判断の根拠となる調査資料はこのとおり黒塗り部分が続いています。肝心の部分が開示されず、私も歯がゆい思いです。御社は労働基準監督署の調査した情報を共有することでパワハラ防止に活かしていきたいという、そういう考えで宜しいですか？」

「はい、そのように考えています。」

「私は、今回不開示と決定された部分を含め、全ての調査資料の開示を求めるために、厚生労働大臣あてに、管轄の労働局の一部不開示決定に対する不服申立ての審査請求をしました。現在、追加の情報開示の可否については、総務省の情報公開・個人情報保護審査会に諮問されて、審査中です。不開示の情報が不開示とされた理由に、会社や調査対象の個人の権利利益を損なうおそれがあるということがありました。御社は、自社に関する、秘密情報の権利利益を放棄することになったとしても、情報の全面開示を希望しますか？」

「そのように考えています。」

「わかりました。御社も調査資料の全面開示を希望している旨の意見をどのように当局に伝えるか、検討させていただきます。御社には、労働基準監督署の調査した情報を共有することによって、真相を究明して、パワハラ防止を推進するとお約束してください。」

「はい、お約束します。」

「ありがとうございます。本日は、私から社長あてに、お手紙をご用意しました。」

父さんは、社長に、仙洞運輸あての「要望書」と書かれた書面を手渡した。

「息子の自殺の原因について、自分の考えをまとめました。そして、加害者とその管理者の処分についてお願いします。社員の処分について、私には何かする権限はありませんが、これまでの調査で分かったことを

踏まえて、私の意見をお伝えします。お返事に関して期日は設けておりません。お返事をいただける場合は、書面で回答をお願いします。」

「分かりました。現段階でお答えできる範囲になるかもしれませんが、ご回答したいと思います。改めて息子さんのご冥福をお祈りします。お父様のお考えに寄り添いつつ、真の原因究明と再発防止に取り組む所存です。」

《九月二十九日》

午後、父さんは、瑞木総合法律事務所を訪問した。

九月二十二日に、仙洞運輸の社長から労働基準監督署の調査資料の全面開示を希望するという話があったことを弁護士に伝えて、これを踏まえた対応について、今一度相談が必要だったからだ。

瑞木弁護士と綿矢弁護士から説明があった。

「会社は、労働基準監督署の調査資料の全面開示を求めているとのことでした。お彼岸焼香におけるお話も誠意あるものであったと感じます。今回開示されなかった情報の中には、仙洞運輸に関する情報があります。仙洞運輸自身が情報開示に同意していることを伝えれば、追加で開示される情報もあるかもしれません。仙洞運輸の社長に、調査資料の情報開示の同意書に署名、捺印をいただくことにしましょう。同意書の文言については検討して私どもがご提案します。」

「よろしくお願いいたします。」

瑞木弁護士と綿矢弁護士は、すぐに仙洞運輸の同意書の文案を作成した。

《十月三日》

午後、父さんは仙洞運輸の本社に行き、仙洞運輸社長と人事部長に、会社として情報開示に同意するという同意書を手渡した。

「同意書については、署名、捺印させていただきます。」

仙洞運輸の社長は、会社として、労災保険給付に関する労働基準監督署の調査資料を開示することに同意した。

「ありがとうございます。」

「それから.....お父様の要望書の趣旨に従い、従業員に対して再度のヒアリングを実施している最中です。パワハラに関連した従業員の処分については、その調査結果を踏まえて慎重に行いたいと考えております。要望書に対する回答は、もう少し時間を頂きたいと考えております。」

「もちろんです。お待ちしております。」

「先日、ご自宅に伺った際に調査資料の総括（結論部分）を頂きましたが、引き続き労災保険給付に関する情報については、弊社にも共有をお願いします。弊社は、それらの資料に基づいて、原因究明と再発防止に向けて対策を進めていきたい考えです。」

「分かりました。よろしくお願いいたします。」

《十月十日》

父さんは、追加の情報開示について諮問を受けている情報公開・個人情報保護審査会あてに二回目の意見書を提出した。二回目の意見書には、仙洞運輸社長の、会社の情報開示に同意するという同意書を同封した。

《十二月二十六日》

クリスマスの翌日、年末が近い。父さんはコートに身を包み、仙洞運輸に向かっていた。これでもう何度目の訪問になるだろう。

ビルに入ると、社長、取締役常務、人事部長の三名が父さんに向けて頭を下げた。父さんも静かに頭を下げる。

「ご息様のご逝去について重ね重ねお悔やみとお詫びを申し上げます。誠に遅くなりましたが、お父様の要望書につきまして、回答をさせていただきます。」

「お願いいたします。」

「弊社はハラスメント防止のため、従前より研修、社内体制の整備を行ってまいりました。ですが、正之さんへの業務上必要性和相当性のない言動を未然に防止することができませんでした。改めて、深く反省するとともに、改善を行う決意をここで表明させていただきます。」

社長が深く頭を下げた。

「まずは、ハラスメント行為の検証をしました。今回のハラスメント行為の未然防止ができなかった要因は、いくつかありました。ひとつひとつご説明します。

①中でも管理責任者である所長の責任は、重大です。ハラスメント防止に対する意識が不十分でした。所長としては、遠山に関する問題を把握していたか、把握できていたはずで、所長がハラスメント防止のために

人事上の問題に配慮して関心を十分に持っていれば、未然防止ができた可能性が高まっていたのではないかと考えています。」

「はい、私もその部分に関しては同意です。」

「②内部通報制度の問題も発覚しました。調査の過程で、「内部通報が不利益に取り扱われる」という懸念があって、ハラスメントと思われる行為を知ながらも内部通報を躊躇した従業員がいることが分かりました。これも重大な問題です。結果として内部通報制度は機能していませんでした。内部通報制度を法令に則って運用すること、内部通報が不利益に取り扱われることはないことを含めて、内部通報制度を正確に周知し、問題があれば内部通報できる環境づくりに改革してまいります。」

③また、ハラスメントについての社内教育とその理解度の確認が不十分でした。今回、「業務上の指導」という名のもとで、必要性和相当性を欠くハラスメントが発生し、これを防止することができませんでした。弊社ではハラスメント教育として必要な教育を実施しているつもりでしたが、十分な理解に至っておらず、実際の職場でハラスメントが行われていたにもかかわらず、それをハラスメントであると認識して防止することができていませんでした。」

④この他にも、当該事務所と本部部門のコミュニケーション不足や、同じ事業所で働くパートナーズの従業員とのコミュニケーション不足の問題もあったと考えます。例えば、社員の業務変更について、事業所単位で所長のみが判断するのではなく、人事部への相談や産業医の助言を受けた上で対応を行うべきだと考えます。仙洞パートナーズの従業員も、同じ事務所で作業を行い、ハラスメントの実態を知っていましたが、弊社はその問題を拾い上げることができませんでした。この点については、弊社と仙洞パートナーズとで、執行部門の人事交流を行うこととし、両者間の意思疎通を図っております。」

「承知しました。」

「続いて、関係する社員に対する人事上の措置についてご説明します。」

①遠山に関してはハラスメント行為の直接の当事者であり、亡くなる前日にも大きな声で叱責をしていたことが確認できました。労働基準監督署の調査結果でも、遠山のパワーハラスメントによる心理的負荷は『強』と判断されています。遠山に関しては既に人事異動を行い、当該事務所を離れています。」

②次に秋原についてです。彼女は遠山のハラスメント行為を認識していながら、それを所長に相談するなど制止するような行動をせず、かえってハラスメント行為を助長するような雰囲気を作っていたという問題が確認されました。彼女にも既に人事異動を発令し当該事務所を離れております。」

③所長の進藤については、本人は遠山のハラスメント行為を直接見聞きしていなかったという言い分ですが、事業所の責任者として、正之さんを含む、遠山とその周囲に関しての配慮を欠いており、ハラスメント問題の認識に至らず、遠山を指導できずに、この件に至ってしまったという問題があります。このことを踏まえて、来年、令和六年一月付で人事異動とする予定です。」

これら三名は、賞与の減額と始末書の提出、出勤停止を行っております。」

また、弊社人事部長についても、厳重注意、弊社役員四名につきましては、一定期間、報酬の一定割合を自主返上することになりました。」

「御社の職員に対する処分について、私が口を出す立場にはありません。ただ、私個人といたしましては、本質的なパワハラの原因は秋原さんにもあると考えております。遠山さんと秋原さんにおきましては、刑事責任の追及を検討しております。御社に対しては、安全義務違反に基づく損害賠償を民事で追及する考えです。」

「お父様のご意見については承りました。」

最後に、今後の取組みについてお話をさせてください。まずは全社を対象にハラスメント実態調査を実施しております。今回の事案を踏まえて、ハラスメント防止に関する規程の見直しをします。また、内部通報制度の見直し、外部相談窓口の設置など、本件のようなハラスメントの相談窓口の見直しを検討しています。これらの規程や制度は、引き続き周知する予定です。この他にも、風通しのよい職場作りや、社員が自分の心身の健康を維持するための研修の機会を設けるなど、出来る限りのことを考えて実践します。」

「ありがとうございます。今社長がお話しされた取組みは、どれも重要なことです。必ず実施していただければと思います。それが息子の想いであると私は感じております。」

また一歩前進した。父さんの指先はまだ震えている。怒りか、それとも哀しみか——けして拭えぬその感情をどこにもやることもできずに。

外に出ると、すっかり日が暮れていた。僕は父さんのまっすぐな背中を見つめる。紫色の夕日に背中が染まる。

《令和六年一月十日》

年が明けた。父さんは、新年早々、瑞木総合法律事務所に来ていた。

「刑事については、今月中に地方検察庁に伺おうかと考えています。」

「刑事のことは承知しました。民事についてですが、本件の場合、従業員に対する安全配慮義務違反に基づく損害賠償義務が問題となります。仙洞運輸の場合は、安全配慮義務違反があったことについて、現時点では争っていないです。この場合、損害賠償額という金額が争点になります。損害賠償額については示談交渉を行う方針でいかがでしょうか。」

「示談交渉で良いと思います。」

「稲葉様と仙洞運輸の社長とは、これまでも信頼関係に基づいて、本件のお話をなさってきました。継続して信頼関係に基づく協議を進める素地は整っていると思います。それでは、示談交渉の方針で損害額について検討しましょう。」

「個人情報の開示の件ですが、情報公開・個人情報保護審査会の結果についてはまだ連絡がないようですね……」

引き続き、父さんらは、異議申立てについての判断を待つようだ。まだ開示されていない資料がある。父さんはまだ僕の魂の痕跡を探しているようだ。

《二月十六日》

午前中、父さんは、管轄の警察署に、被害届と事件に関係する資料として、労災の開示された調査資料を提出した。その日、警察署刑事課から事情聴取があった。

「息子さんに対するパワハラのことについて、お話をお伺いします。」

警部補と書かれた警察手帳を父さんは確認し、深く頭を下げた。

警部補は、住所や僕の職歴、それからパワハラ当事者とその内容などひとつひとつ細かく確認していく。その質問に対して、父さんは資料を用いて丁寧に説明をした。

「お父さま、パワハラの行為者にどのような刑事責任を求めるお考えでしょうか？」

「傷害致死は難しいことは承知しています。ただ……パワハラ行為によって、息子は、精神を病んでうつ病になりました。そして自殺という帰結に至ったわけです。職場のパワハラ行為とうつ病との因果関係は、労働基準監督署の調査でも確認されて、労災の認定がありました。労働基準監督署の調査資料は、本日お持ちしました。これについて、パワハラの行為者とこれを助長した当事者も何らかの刑事責任は負うべきだと思っています。」

「私にも子供がいます。お父様の気持ちはよく理解しているつもりです。検察庁で判断してもらうために、必要な書類を作成します。」

《二月二十九日》

仙洞運輸の社長から、労務問題の再発防止のための取組みについて具体的な説明があった。

会社は、ハラスメント防止月間を定めたようだ。僕のことを忘れないように…

ほどなく仙洞運輸は、労務問題の再発防止のための取組みを公表したようだ。

《三月十四日》

父さんは、瑞木総合法律事務所に行き、弁護士に、仙洞運輸の社長から再発防止策の説明があったことを伝えた。

民事上の損害賠償責任について、仙洞運輸は損害賠償義務があることを認めただけで、損害賠償額の支払を提案していること、そのことを踏まえて、父さんは、損害額については示談で合意する方針だと伝えた。

《三月二十九日》

この日、父さんは、仙洞運輸の社長と合意書を締結した。

三月十九日のお彼岸の焼香の際に、仙洞運輸の社長らが、会社としての合意書案を提示したので、父さんは、会社の合意書案を確認し、この日に合意書を締結した。会社は、僕の死亡の原因が事業所で行われたパワーハラスメントであったこと、この件で会社に損害賠償金の支払義務があることを認めた。

《四月一日》

令和六年四月一日。

僕の命が消えた日から、約三年の月日が経過しようとしている。

その日、父さんはいつもよりもせわしく動き回っていた。事務処理に追われ、ずいぶん忙しそうだった。

父さんは、ずいぶん細かな文章が記載されている書面を握っている。その冒頭には『特定非営利活動法人 まさゆき』と書かれている。この日、父さんは、僕のような人を一人でも助けられるような活動をするために、NPO法人を設立した。

《設立趣旨書》（抜粋）

趣 旨

2021年6月3日、稲葉正之は自ら命を絶しました。25歳7か月の生涯でした。遺書には仕事上の悩み、お世話になった皆様方のお礼、父親である私への感謝の気持ちが記されていました。

告別式を終えて自宅に帰った直後、正之が勤めていた会社のパートの方が自宅に焼香に来て下さり、職場で上司からパワハラを受けていたことを話して下さいました。その後、同じ職場のパートの方数人がパワハラの実情を話して下さいました。

パワハラは被害者の精神状態を破壊し、うつ病の原因となります。極限に達すれば息子正之のように死に至ります。精神状態を破壊し深い苦しみを負い、生きることの希望を失います。私は加害者の刑事責任を追及します。

息子正之は、「皆が仲良く楽しく」過ごせることを望んでいました。大学までの勉学、部活動で地域社会での生活で、本人の至らない所があっても誠実に皆に優しく接していれば報われて、希望の持てる将来が得られるものと信じていました。就職して会社員としての就業環境は、これまでの生活信条を否定されるものでした。努力しても上司との意思の疎通ができず、悩み苦しみ自らの能力に疑問を抱かざるを得ないところまで追い込まれていきました。

日本国憲法の基本的人権の一つには、働く権利があります。働く権利とは、個人の性格や能力、努力を尊重し組織から疎外されることのない環境で、希望を持って働くことができることではないでしょうか。息子正之は、就職して1年にも満たない経験で、直属の上司から個人の尊厳を否定する暴言を1年4か月にも渡り受けたのです。ほぼ毎日、1日に2回、3回「バカ野郎、何をやっている」と暴言を受け、時には椅子を蹴とばされ机を叩かれ続けたのです。別の上司からは、「昨日教えたのにできないの、朝早く来てもできないのではないか」と陰湿な言葉を浴びせられました。時には朝礼で皆の前で些細な言い間違いを注意されました。その行為を許すことはできません。刑事責任を負うべきです。ここに、「NPOまさゆき」を設立して、若者が希望を持って働くことのできる環境を構築する活動を致します。「皆が仲良く、皆が楽しく」暮せる社会環境の構築を目指します。私が経験した会社との和解に至るまでの経緯、これから経験する加害行為に対しての刑事責任追及の経過を公表していきます。企業・組織が、パワハラ防止対策を本気で取り組む、その様な社会の構築に寄与したいと考えています。そのことで、若者が一人でも二人でも助かれれば幸いです。

続く「申請に至るまでの経緯」には、パワハラに関して、お父さんが見聞きしたこと、会社の調査、労働基準監督署の労災に関する調査、それらの結果など、これまでのお父さんの活動の経緯が書かれていた。

設立代表者は、「稲葉清美」

季節はめぐり、春がくる。桜は毎年変わらず咲く。生命を誇るように、花は咲く。春は芽吹き、生命は目まぐるしく駆け巡る。

《六月十九日》

労災に関する個人情報の一部不開示に対してお父さんが審査請求したことについて、情報公開・個人情報保護審査会は、管轄の労働局が不開示と決定した一部の情報について、これを開示するべきと答申した。お父さんの不服申立てが一部認められた。

《八月十六日》

数か月後、情報公開・個人情報保護審査会の答申を受けて、厚生労働大臣は、労働局の部分開示決定を変更し、新たに一部分を開示するという裁決をした。

労働局は、厚生労働大臣の裁決書に従って、変更後の保有個人情報の開示を実施することにした。

父さんは、早速、追加で開示されることになった情報の開示を受けることにした。

《九月十日》

労災保険給付に関する労働基準監督署の調査資料に関して、追加の保有個人情報の送付があった。

労働基準監督署の調査記録に、僕に対する具体的なパワハラ行為の記載があることが確認できた。けれども聴取内容が記載された調書は、開示されなかった。

《令和七年二月十六日》

また年が改まった。夕方、父さんは警察署に向かい出向いていた。

警察からは立件できなかったと説明があった。

「精神科医へ聴取しましたが、息子さんは、精神科医に『パワハラを受けている』という話をしていませんでした。傷害罪で捜査を進めてきましたが、精神科医は、「パワハラを受けている」という話を聞いておらず、精神科医のうつ病の診断と職場のパワハラ行為との因果関係を、刑事上立件するに足る証拠がないこと

が一つの理由です。精神科医のほか、仙洞運輸の社員からも聴取は行いましたが、傷害罪で立件できるほどに犯罪行為を特定するには至りませんでした。」
労災の認定と刑事事件の判断が異なる場合があるということは、父さんも理解していた。

父さんは帰路を辿っていた。警察は、立件できない理由として、僕が精神科医に、「パワハラを受けている」と言わなかったことをあげていた。

「正之は.....自分を責めるばかりで、上司を批判することはできない性格なのに...」

本人がうつ病の状態、確固たる信念で上司のパワハラを訴えることが出来るだろうか。もしそれができるならば、精神科医に通院する以前に、社内の通報窓口を利用したり、他の人に相談したりするだろう。

これまで父さんが経験してきた仙洞運輸とのやり取り、労働基準監督署の調査と労災認定に至るまでの経緯、警察への被害届、捜査結果、行政が保有する個人情報の開示、一連の弁護士への相談、周囲の人たちの支援...そこから得られたことを、この世界のどこかにいる、ハラスメント問題で苦しんでいる人たちとそれを支える人たちのために役立てたい。ハラスメントは人の心身を傷つけて、幸せに日常を生きる喜びを奪うこと、ついにはかけがえのない生命を奪うことを知って欲しい。ハラスメントで自らの命を絶つほどに苦しむ人がいることを知って欲しい——今の自分にしか握めない手があるのではないか。
父さんはそんなことを考えていた。

その日、自宅を片付けていた父さんが見つけた一枚の絵。僕が小学二年生のときに描いたもので、児童生徒美術展特選作品に選ばれた。その絵を父さんが褒めてくれたのを覚えている。

「くじゃくと空のおさん歩」と名付けたその絵を父さんがそっと撫でる。あの日、僕の頭を撫でてくれたときと同じ柔らかな指の感触で。

「.....正之、私は少しくらいお前の手を取ることができただろうか.....」

父さんは泣きながら、絵を抱きしめる。

【第6章】 エピローグ

《現在》

父さんは、父さんの若いころに弾いていた懐かしいギターをどこからか引っ張りだしてきたようだ。僕の記憶のなかでは父さんがギターを弾く姿を見たことはないけれど。

父さんは、その年代物のギターを手に、僕の作った詩「孔雀に乗って」にメロディーをつけて唄っている。

七歳の時夢を見た
孔雀に乗って大空飛ぶの
緑の田んぼにそよぐ風
みんなで仲良く遊んでいるよ

七歳の時夢を見た
SL乗って遠くの町へ
緑のお山にこだまする
みんなで楽しく歌っているよ

七歳の時夢を見た
大根堤風あげするの
コスモス畑にそよぐ風
みんなでわいわい走っているよ

みんなで仲良く暮らそうよ

「みんなで明るく仲良く」それが僕の信条で、願いだ。

優しい父さん、母さん、おばあちゃん、親せきのおじさん、いとこたち、友人、恋人、先生たち、近所のみなさんがいつも見守ってくれた.....それに職場にも僕のことを気にかけてくれた温かい人たちがいた.....たくさんの人から優しさを受けて、励まされてきた。

僕は、ふと父さんの背中に手を伸ばす。指は触れられないまま、空気をかくだけ。

「お父さんに触れたいのね？」

「うん...ありがとうって、身体を大事にしてこれからも生きていってくれって.....もっとお父さんと話をしたかった.....」

僕は膝から崩れ落ちて、涙を流す。僕の涙をクロチの小さな指が拭った。

顔を上げると、クロチが僕を優しい笑顔で見つめていた。

「君はお父さんの魂の中で、いつまでも生きていられるんだよ——」

——なんだろう、ここ。すごく、あたたかい。

くじゃくが空を飛んでいる。きらきらと光る羽根がとても綺麗だった。

僕はそのくじゃくの背中に乗っている、父さんと一緒に。

父さんの夢の中に入り込んだみたいだ。

「素敵な夢だね、父さんの夢」

「そうだろう。」

父さんがくしゃりと笑う。久しぶりの穏やかな父さんの笑顔を見て、僕もなんだか嬉しくなった。

柔らかな雨に濡れた紫陽花の匂い。花びらがちらちらと降る。花と星と太陽と月の光るこの場所こそが天国のように美しい場所だと思った。僕と父さんは、何気ない話をたくさんした。どうでもいいような話ばかり、でも、今そういう話をするのが一番幸せだった。みんなにとってもこんな幸せが続いたらいいな...

僕は祈っている。

みんなが希望を持って、

みんなと仲良く、

みんなと楽しく、

生きていくことができる

世の中であることを。

ばちりと夢が終わったみたいだ。

気がつけば、あの白い空間で涙を流して立っている僕がいる。隣にクロチがいて、優しく笑って僕の手を握っている。

「夢はどうだった？」

「うん。とてもいい夢だったよ。」

「すべての記憶は思い出せたかしら？」

僕は視界を天に向けて、それから足元を見た。僕の足元には僕が消える寸前までの足跡がある。生きていた証。その跡を、今は、父さんがつけてきてくれた。あの場所で確かに生きてきたことを証明するように。

「うん。思い出したよ、全部。」

クロチは優しい眼差しで僕のことを見つめる。あたたかくて、優しい顔で。

そういえば、クロチ.....

「ねえ、僕、君にどこかで会ったこと、ある？」

「さあ」

クロチは首を傾げてほほ笑んだ。

この白い空間には、淡い紫、ピンク、白、黄緑、あの紫陽花も咲いている。